

は能きないだらう。そんな賣物買物たる三文貞操は今後廢棄しなければならぬ。女でも男でも独自の個性に向つて愛したのであれば、一夫一婦の關係従つて生じ、また、それは一生續くものでもあるので、貞操は女と共に男にも自然に附隨し來るべきものたるのみ。人格的な關係で、それが全的なものであり、それは一人が他によつて二倍になつたと感ずるものであれば、抽象的な戀愛ではなく、肉でありさへすれば、相手選ばずと云ふ類ではないので、それは孰れにしても、特定の個性との戀愛となり、その結合は即ち一夫一婦の形式を採り、また、それが持續するべきものともなるであらう。かくて、貞操は必然的にそれと相即不離の關係をもつて現はれねばならぬ。純眞な戀愛はそれ自からの本質として永續性をもつ。全人的結合である独自の世界に生れる一人の男と一人の女との永續的關係が所謂貞操である。それ故に、貞操は純眞なる戀愛と結婚の附隨物だと云ふことが能きるであらう。

第五節 一夫一婦の原理

一夫一婦制と人格及個性 フェルスタア氏の一夫一婦觀はエルレン・カイ女史に對し、それと力爭しようとして試みられたものである。氏の眞面目と熱心と誠度とは敬服すべきものであるが、明かに、カイ女史を誤解し、若くは、その眞義を理解せざらむとするもので、感情一天張りの舊思想によるものであると云つて宜い。フェルスタア教授はカイ女史の論義が離婚に導くものであるかのやうに取扱ひ、恰も、聖教徒が異端者に對するが如き口吻を弄してゐる。併しながら、カイ女史の戀愛觀が、永續的な一夫一婦に接近しようとするものたるは明かである。これは、カアペンター氏でも同様で、一見、放縱不羈のやうな議論の中に、自から嚴肅な新道徳が生れて來るのである。因襲や法律や道徳に對し、天保頭で固執しなくても、その間に、自から道徳も法律も生ずるのだ。

純眞の戀愛觀のうちには、自から道德と法律との根據が含まれる。道德と云ひ、法律と云はなくても、その兩者は自然にそこに具現する。この理を了解しない爲めに、フェルスタア氏はカイ女史一流の戀愛觀に杞憂を抱くのである。

カアペンタア氏は *Love's Coming of Age* の百四十一頁に於て、『私の議論は一見原始的な離婚へでも導くものと考へられるであらう。勿論、かやうな人々は純眞な結婚と人類の傾向が漸次に特定の個人との一生渝りなき結合に到ると云ふ原則に反するとするであらう。併し、私の意義を味讀した人々は再び誤解をしなければと思ふ。進化の原則としては、不確定より確定へと進むべきもので、それを、どうしようとして、どうすることの能きるものではない。戀愛の本質としては、漸次、より永續的確實的なものに進むのである。それは永久的な結合に至るまで進行を止むるものではない。人類が進めば進むほど、その關係はより確實になりすゝむのである』と云うてゐる。フェルスタア氏は斯様な愛の

本質を理解するところがないやうに見へる。カアペンタア氏は尙ほも續いて言ふ、それは當然の事理に従つて考ふれば、人類の關係は靈魂の奧秘より考ふべきもので、外形に即して考ふべきものではない。人類を集結する限りのものは、天上の都市の反映たるべきものである。靈魂の奧秘を想像することは一つのユトピヤではなく、人類歴史を通じて漸次それは示現せられるべきものである。これに次いで、カアペンタア氏は最も美しく最も力強く、『兎に角、これ等の内の法則—性的感情、愛及び人類關係の内的法則—が漸次に實現し、それによつて導かるべきものたるは明かである。そのみが、合理的社會をつくり維持する力をもつのである。外的法則は死した生命なきものであるから、必然的に消失すべきものである、まことの戀愛は、社會の自由に於てのみ可能である。自由が愛の實在である限りに於てのみ可能である。性的關係が法的關係に服従することは堪えざる束縛であるが、それは人々が單なる性慾の奴隷である限り、

如何ともいたし方のないことである。法的因襲と性慾とは、お互に對衡をなしてゐる。併し、戀愛がその眞實性を發揮して、性慾を統御するに至り、それを奉仕せしむるやうになれば、法の不合理法は消滅するのである』と論じてゐる。もう、これで澤山だ。フェルスタア氏は外的な法的觀念の外何も知らないので、カアペンタア氏の内的法則や、カイ女史の個性的具體的戀愛などは、知らないものだと言つた方がよい。

フェルスタア氏の恐れるところのものは、カイ女史の戀愛觀が成立すれば、亂倫な世界が開展せられると云ふことである。併し、その反對が寧しろ正しいと云ふことは、これまで述べたところ、また、これから検討するところによりて、明白となるだらうと思ふ。性慾を土臺にして結合するものは、無論竟に男女關係の破綻をあらはすけれども、内的法則により、人格を土臺とするものは、決して、そのやうな憂のないものである。却つて、因襲的結合や強制的結合の

方が亂倫にいたる機會が多い。だれしも、今日の一夫一婦が形式的のもので、實質的のものではないと云ふことを知つてゐるであらう。これは、表面上の一夫一婦ではあるが、果して嚴密な意味に於ての一夫一婦であらうか。妾を蓄へたり、あだし女に戯れたりする一夫一婦が本當の一夫一婦制と云はれるであらうか。今日の一夫一婦は一夫多妻的のものであると云ふのが公然の祕密である。斯様な羊頭狗肉な一夫一婦の行はれる根源はどんなものであるか。フェルスタア氏の恐れるやうな自由なる戀愛と人格的結合とが亂倫になるか、却つて、フェルスタア氏の主張する因襲結婚や強制的結婚が亂倫に到るか、先づ、フェルスタア氏の説を通覽しなくてはならぬ。

在來の結婚制度は變化し易き感覺や動搖し易き肉慾を完全に制御する確定せる形式である。これが、眞に人格的生活に到達する唯一の保證であり又有力なる手段である。明確で秩序ある儀式或は形式に依らなくては、十分な自覺を發

達せしめ、最も深き個性を開発し、もつて、一時的な誘惑や感覺的興奮の襲撃に堪へることはできない。我等は一時的の氣分と印象との玩弄にならぬやうに、最も深き自我と協議しなければならぬ。性的方面に於ては確定せる結婚形式を守ることが、臆て眞實なる行爲の自由を實現することになるのである。若し、永久的形式を守らないで、任意にこの共棲を解きうるならば、一時的な色情や、變化し易き情念に翻弄せらるゝことにならう。確定せる結婚形式は堅固なる永久的自我の表現とも云ふべきものである。外面的結合は嚴肅と重力とをもつて内的結合の強烈性と多様性とを十分に象徴するものである。永久的確定的形式は外面的強迫ではなく、内的事實を外面に表現したものである。結婚の形式は性的關係の外的結果を表はしたものである。

フェルスタア氏の言ふが如き結婚の形式が相互の關係を維持する上に於て有効であり、また、それによりて、一時的な情念や、變化し易き感覺を抑制する

としても、フェルスタア氏は内的法則による男女關係の本質に就て誤解し、若くは、その意義に通じないと云ふことも同時に明かである。内的な人格的な愛が發達しさへすれば、それは強固な結合を表はしうるが、フェルスタア氏はこれを一時的な變化し易い男女關係と見てゐる。これが大なる誤解である。その上、内的人格的な愛を、却つて、みだらな愛と見てゐる。これは、愕くべき謬想である。フェルスタア氏は、カイ女史の主張は、人間は善くも悪くも強烈なる色情に放任すべく、人間は卑しき本能の奴隸たるべく、單に性慾のために生くべしとするものだとしてゐる。が、これは女史を誣ふるの甚だしきものである。強烈なる色情に放任したり、卑しき本能の奴隸となつたり、單に、性慾に生きるると云ふことは、野合戀愛であつて、自由戀愛でない。この意味に於て、フ教授は野合戀愛と自由戀愛とを混同してゐるものである。戀愛の自由を許したからとて、亂倫にいたり自由性交に墮するものではないのだ。戀愛の自由は

平等な二つの人格の性的結合であるが故に、個性を中心として行はれるもので一つの人格が他の二つ以上の人格に結合することは有りうべからざることである。個性の發達した自由な戀愛は結局一夫一婦別に落ち付くべき筈のものである。自由、個性、人格、戀愛、一夫一婦と云ふもの、間には、一貫した脈絡がある。これ等を引き離すと云ふことは能きるものでないから、畢竟、一夫一婦制を固執しようとするフ教授の主張は自由戀愛に於て先刻完全に實現さるゝこととなる。かやうなわけで、教授は恰も幽靈に向つて相撲をとつてゐるかの如き觀がある。カイ女史を以て、色情や、劣情や、性慾を主眼とするものゝやうに言ひ做すのは、女史の言はないことを言つたとするもので、的なく甚だ腑甲斐のない攻撃だと云はなければならぬ。御苦勞千萬とはこのことである。

そもく、戀愛と云ふことを純粹に生理的に考へ、性慾だの、色情だの、本能だのと云ふことばかり土臺にするから悪いのだ。そこで、戀愛の歸結とは異

つた性慾の歸結になり、亂倫、放縱、野合となるのである。男女の結合を生理的見點よりでなく、人格的結合から考へるならば、戀愛は飽くまで社會の綱紀と一致するものとなり、ために、風紀は廓清せられ、男女の道は清淨なものとなる。男女の道を自由なものとなし、氣の向いたまに／＼進むものとすれば、人間生活は紊亂し放埒なものとするのは、全然俗見で、世俗の謬見である。これをフ氏が眞似ると云ふことは論理的な透明を缺くものと云はなくてはならぬ。自由な男女の交際が性の放縱となり、自由性交の亂倫状態を生ずるとする俗見は嗤ふべき杞憂にすぎない。寧ろ、その反對が正しいので、在來のやうな形式一天張りな男女關係や強制結婚や經濟や政略の齎らすところのものは、縦へ表面は一夫一婦であつても、けふ吳客を送り、あす越人を迎へる底の一夫一婦でこれこそ、現時我々の見るが如き自由性交の亂倫状態を生ずる源流である。然るに、もつと自由で、もつと平等な戀愛からは、靈肉分離の奇怪至極の男女關

係は生れずして、却つて、至純なる一夫一婦の貞操が生れるのである。斯様な論理の指示するところのものは、フ氏の説よりの亂倫、カイ女史よりの清淨と云ふことである。見かけの嚴格で内味の厄介なのがフ氏の説、外面はゆとりがあつて、内面の秋霜烈日なのがカイ女史の説である。

フ氏は云ふ、「自由を許すとしても、何ものを自由にするかを問はなければならぬ。性的關係が全く個人の自由に放任され、制御的形式と道德のない社會に如何なる事件が起るかを考へるならば、偉大なる愛は自由に發動せずして、却つて、卑賤な激情、官能の惑溺、變化の慾求、焦燥不安、情慾、不信不實と云ふやうな利己心のみが解放せられることを知るであらう」。フ氏の道德的熱情には何人も敬意を表さなくてはならないが、その一半は、確かに誤解であり、謬見である。秩序ある形式と人格的自由と云ふことは兩々必要であらう。秩序ある結婚の形式と云ふものゝ強制は男女關係を正當なものとする效力のあるも

ので、一夫一婦制の強制力に何人も異議を申立てようとはしないだらう。併し、秩序なる形式と人格的自由とが兩立しないと考へるのは餘りに固陋な見解である。自由が立てられるところには、自由の逆用のみあつて、卑賤な官能的耽溺や淺劣な變化の希求のみがあるとするのは、餘りに人間を動物扱ひにするものである。併し、どこまでも、人は人であらう。これを動物扱ひ畜生扱ひにし、戀愛の泉を自由にしたならば、禽獸のやうな亂倫状態にいたり、亂婚に導かれると、獨り決めるのは餘りに人間を侮辱したものであらう。人間をして、人間たらしめたならば、當然、人間の價値は發揮せられ、人間としての男女關係は進展するであらう。自由を善用するところに、秩序ある形式と一致する男女の結合が生ずる。自由さへあれば、一夫一婦の貞操観が強制なしに自から樹立し、期せずして、男女の純潔が保たれるであらう。それに反し、強制があり、たゞ、秩序ある形式のみを振りまわすところには、現代我々の見るが如き

亂倫と亂婚とが生ずるのである。

フ氏は云ふ、『愛情のさめた時、妻が分娩のためにその色香を失つた時、自から離れ去る總ての男子に新らしい色情的慰樂を求める権利を與へると云ふことは危険なことである。……人間をして、一時の氣儘に従はしめず、色情の迷誤に陥らしめないやうに守護してゐる制御形式が破壊した時には混亂状態が生ずる秋である』。フ氏の主張は健全なる意味を含むであらう。併し、これ又野合戀愛の形式には當てはまるかしらぬが、自由戀愛には關係のないものである。イブセンの『海の夫人』にある自由を戀ふ妻エリイダは絶えず動搖をついけてゐて、自分の夫だけに待つことが能きず、夫だけを受することが能きなかつた。彼女の心は外國船の運轉士によつて透はれた。この運轉士が到頭彼女を誘惑せむとて來た時、夫ヴァングルは思ひ切つて、その妻に自由を與へ、思ふまゝになさしめた。その刹那、女の心は眞の愛にめざめた。誘惑をふり捨て、留り、

只管、夫の愛に奉仕するものとなつた。これが、自由によつて純清なる男女關係にいたつた一例である。フ氏は自由のないところに純眞な戀愛のないものと云ふことを理解してゐないやうに見える。

フ氏は永遠の愛を夢想するが如きは馬鹿の骨頂だと云ふ。我々は永遠の愛を夢想せざるが如きは馬鹿の骨頂だと答へる。フ氏は、『偉大なる永遠的の愛と云ふのが如きものは存在することはない。極めて幸福な結婚にあつてすらも、男女兩人が常に渝らざる同一の色情を有することは殆むど稀れである。否、性的生活の秩序を保つには斯様な最高稀有の感情に依頼することは全然できない』と云ふ。これは、矢張り、世俗の見解に據つたもので、戀愛の眞髓に觸れたものと云ふことは能きない。フ氏は、これでもつて、カイ女史の論理をかき亂だしたやうに思つてゐるらしいが、カイ女史は却つて、『戀愛は二人の男女を互に獨立させてゐながら、それを兩者一體たるべき完了に向つて發展してゐるもの

で、かくの如き戀愛は、男女は相互にそれ／＼たゞ一人の男女に、しかも、一生の中、唯一度だけ現はるべきものに導く』としてゐる。これで、フ氏の射つた矢は的のないものに向つてなされたと云ふことが合點せられるだらう。次から次へと相手を變へてゆくやうな戀愛は、毎度言ふことだが、それは色情であり性慾であつて、戀愛ではないのだ。併し、戀愛が移り變らぬものだと云ふのではない。戀愛も個性の成長に従ひ、發達に應じて、移り變つて行く。個性と云ふものが死物のやうに固定したものではないからだ。それ故、共白髪までといふ夫婦でも、お互の個性が變動すれば、戀愛の動搖を感ずることがある。個性の變化によつて、動搖を感ずるが如き戀愛は至上の戀愛ではない。この上のない純眞の戀愛と云ふものは、絶えず建て直ほしをやつて、新装を凝すべきものである。それは、日々にこれ新たなりと云ふ底のものであるのだ。かやうな戀愛は永久に繼續するものである。永久に繼續しないやうな愛が何故に多いか。

朝三暮四の戀愛が何故多いかと云ふことは、現代の固陋の結婚形式が大半その責任を分擔すべきものであるのだ。一夫一婦だと云つてゐて、しかも、離婚を實行してゐるやうな、不眞面目なものが、永久の戀愛をもち立てうる道理がない。戀愛を變じ易きものゝやうに考へてゐるのは、淺慕な思ひ付きの戀愛であつて、独自の個性に向つて一生にたゞ一度だけと云ふやうな嚴肅なものを對象として言つてゐるのではない。そのやうな不眞面であり、初から脆弱で、寧ろ、戀愛と名付くべきものでないものに對して、こればかりが、戀愛で御座ると云つたやうな論調で、戀愛は變り易きものと古今相場が決つてゐる、性的秩序を保つには、かゝる最高稀有なる感情には依頼することができないと云ふのは、随分と可笑なことである。戀愛の永久に燃えないのは、假構な戀愛で、人間性そのものゝ至高至醇の發現たる戀愛でないからだ。戀愛は人生だ。そして又、人生は戀愛だと。かう云つたやうな戀愛が古今變色する例はない筈だ。因襲だ

の制度だの形式だのとフ氏のやうに世俗がやかましく云ひ立てるものだから、却つて、人生そのものである筈の戀愛が人間性を置き忘れて溝際に咲いた花のやうに見にくいものとなるのだ。花一輪、これを百花燎亂たる花園へ移し植ゑたらどんなものか。因襲だの制度だの形式だのと云ふ古道具屋の見世に出陳したやうなガラクタを持ち出してきて、虚偽や見榮を強いるものだから、結婚の晩から嫌になるやうな男女の關係が出来上るのだ。戀愛そのものに人生があり道德がある筈だ。その外に、人生も道德もないとする至高至醇の戀愛は、カイ女史の所謂一生涯の中で唯一人唯一度であるべき筈のものだ。斯様な戀愛に依頼するのは最高稀有の感情に依頼するもので、危険この上もないと云ふのか。カアペンタア氏の『一方、美と自由とを殺して、人間性を鐵のやうな冷たい一つの型にはめもせず、他方、雑婚といふ沼の中に陥まり込む危険をも免れしむるものは、純眞な戀愛によりてゐる』と云ふ所以の意味も全くこれと同一であらう。鐵のやうな冷たい一つの型もいやだし、雑婚といふ沼に陥まり込むことも無論いやだ。フ氏に従へば、嫌應なしに、鐵のやうな冷たい型にはまり込むのだ。

併し、發達する個性には思ひをいたすべきだ。お互に個性は發達してゆく、一方が發達を停止しても、他は遠慮なく發達してゆく。ついに、兩方の個性は段ちがいと云ふことになる。段ちががつて揃つてゆけないのは、びつこの足の顛倒を免れることの能きないのと同じだ。それでもつて、戀愛の永續を主張するもの無理だが、斯様ないきさつから、離れ去る戀愛を以て、戀愛は凡て移り變はるものと断定するのも迷惑なことだ。賣淫だの、不見轉だの、駄洒落だの、戀愛を以て、變り易きもの、標準となし、フ氏のやうに、極めて幸福な結婚でも、兩人が強く深き愛を永續的に感じうることは不可能であるから、我々は性的生活の秩序を保つにあたり、斯様な最高稀有の感情に依頼することは能

きないと断定するのは、如何にしても、失當なことではなくてはならぬ。フ氏は戀愛を對象とせずして、性慾を相手に論陣を張つてゐるものである。

一夫一婦制と形式 併し、フェルスタア氏の後半の議論と思想とは正しい。有りふれた劣情や、卑賤な劣情をもつて、人生の大事を決行することは無論能きない。離婚はカイ女史の主張するやうなものであつたら一考して宜いが、無闇に離婚を斷行することは無論よくない。一時の氣紛れや、氣分でもつて、離婚すると云ふやうなことは悪い。忍耐と本務の觀念を以て、一定の形式を守つて行くところに積極的な二人の幸福があるだらう。義務や責任を放棄して、勝手な眞似をすると云ふことは決して幸福でない。深く心内に潜む不安と動搖と利己心とを制御し、傳來の形式を固執して離れまいとすることは無論必要である。變じ易く移り易い男の秋の心を以て容易に離れ去ることは大なる罪惡であるに違ひない。移り變り易い男女の關係を秩序ある形式にはめ込み、これを動

かさないやうにする道德的熱情は如何にしても必要である。皮相の愛情の減退した時だの、妻の色香を失つたときだの（我國の女は結婚後化粧に氣をつけないで、雀の巢を頭につくり、未婚時代にのみ滿艦飾をやるが、これでは愛の術に拙いので、武運ついに拙しと云ふことにもなり易い）他に毛色の變つた女があつた時だのに、男子に新らしい色情的慰樂を求め権利を與へることは能きないに違ひない。斯様な無法な権利を男子がもつて居ると云ふ道理はない。斯様な権利は剝奪しても差支へない。これには、凡て、一定の秩序ある形式にはまり込み、一夫一婦制を嚴守することを命じなければならぬのだ。戀愛は一生涯繼續する共棲といふ神聖なる理想より發する恒心と責任と同情と忍耐との訓練によつて制御しなければならぬ。トリスタンとイゾルデのやうな偉大な愛情を繼續することは極めて尠いから、多くの結婚にはトリスタンがあつてイゾルデなく、イゾルデがあつてトリスタンなく、また、大半はトリスタンもイゾル

でもないのだ、この人間性の弱點と缺點とが明かになれば、一夫一婦制と云ふものゝ神聖なるものだと言ふことも合點せられやう。フ氏はオーギュスト・コントを引いて、『心情は極めて變り易いものであるから、社會は一切の動搖や不定や氣隨氣儘に干渉しなければならぬ。然らざれば、人生は墮落して、無目的無價値のものとなるであらう』と云うてゐる。これに應ずるものが一夫一婦制である。『眞の自由社會は、社會をして、堅固ならしめるところの確定的形式に向つて知識的乃至意志的に衝動を服従せしめることを主眼としなければならぬ。斯様な形式は人類の經驗と知見を具現するもので、個人をして、社會の安寧秩序と同胞の要求及權利とを調和せしむるものである。衝動と情念との世界に對するかやうな守護と抑制とは自由の基礎である。……形式と自由とは決して矛盾するものでない。人間性のうちには、自由を奪ひ、常に同胞の自由と安全とを脅かさうとする放縱で非社會的な感情がある。形式はこの感情を抑壓し

鎮靜するものである。』性的行爲は不規律なる興奮や、一時的な衝動に陥り易いから、これを一定の社會形式によつて、それを規律することにより、初めて男女關係が整頓するとする見解は誤つてゐない。但だ、これによりてのみ、純眞な男女關係が來るとする見解が謬妄である。そして、以上の見解は、頑迷固陋なる形式論に墮し易い。フェルスタア氏も一半は頑迷者流と同一な誤解や謬見に陥り、純眞な戀愛の何たるかを充分理解する程度に達してをらぬ。併し、その半分は確かに正しい。こゝに於て、我々は、フ氏と共に、卑賤なる感覺や衝動から解放せられ、一時的な氣隨氣儘な色情から釋放せられるために、一夫一婦制を樹立勵行しなければならぬとしよう。

第六章 兒童の基本的權利

婦人と母親 婦人が人類に取つて大切か、母親が大切かと云ふことになる。

カイ女史のやうに、『婦人が國民の最も貴重なる財産ではなくして、母親が國民の最も貴重なる財産たるのである。そして、その貴重さは、母親の職能を保護してさへ行けば、社會は自からその最高の幸福に到達し得ると云ふ程のものである。そもく、この母親の職能といふのは、小兒の産出と、その養育とのみに限られるものではなくて、小兒の訓練期間の全部に向つて働くものである』と云ふ所論が正しいとしなければならぬ。男女關係に於ても、子供は見逃すことの能きぬ大切な存在である。我々は婦人を大切だとするよりも、子供の母親としての婦人が大切だとする思想に進まなくてはならぬ。今日、子供は神聖なるものとして見られるやうになつて來た。子供は親の附屬物でも、所有物でもなく、両親自身勿體ないと云ふ感じなしには『神祕な子供』に近寄れないやうになりつゝあるのである。實は、戀愛と云ふことも、結婚と云ふことも、母たることも、立派な子供をつくると云ふ一事に集中してゐるのである。この種

族觀は、寧ろ、個人觀としての戀愛や結婚や母たる資格に對峙する。種族の進化發展を來すと云ふことが何より大切である。性の道德的觀念を人生の向上に一致せしめ、性の全局面に神聖なる意味を瀰漫せしめ、人生の向上發展を圖ると云ふ目標の上から、我々は性を以て崇拜すべき對象となさなければならぬ。それ故に、健全有爲な子供を生むと云ふことは何よりも大切なことである。兩性關係は健全有爲なる子供を生むと云ふ手段として寧ろ神聖なものとしなくてはならぬ。これ程、小兒は神聖なもの神祕なものとせられる。小兒の前には、その他の關係は稀薄になつて、恰も、影法師の如きものとなるのだ。夫婦が形式によつて出來上つたものか、乃至、單なる兩性關係に終始してゐるものか、と云ふやうなことさへも、善良有爲な子供を生むと云ふに對しては羽毛の如く輕いのである。健全な愛情のある男と女との間に生れて、睿知と慈愛とによりて育成せらるゝ小兒でありさへすれば、両親の結合が形式によらうがよるまいが、

それは寧ろ第二義的のものとせられる。これが、今日の時代相である。併し、孰れにしても、形式と法律とを通じて、結婚を正常なものとしなければならぬ。これは疑のないことである。但し、形式と法律とを通じて行つた結婚でも罪の盟約と云ふべきものがある。それは當事者の意志に逆つてやつた無理強いな結婚で、單に役場へ手續をすましたと云ふものゝ如きものは、形式と法律とが調つてゐても、罪の結婚だと云ふことに何の變りもない。色情のためだつたり、一時の氣紛れのため相手の遺傳も録々調査せずに結婚するなどは、種族に對して重大なる犯罪をしたもので、子供に對する責任の上からは金箔づきの罪の結婚だと云はなくてはならぬ。愛情のない遺傳の悪い男女が結婚して不良劣弱な子供を生むと云ふことであつたら、それは、縦へ、セント・ペテル寺院で法王の立會の下に結婚しても不正な結婚であるとカイ女史は力説してゐる。正式の結婚をすればそれに越したことはないが、セネットル及カミネル兩氏の洗滌

なる遺傳研究もあることだから、一應それに相談しないで結婚すると云ふやうなもの、正式と否とに拘はらず、今後絶對的に排斥すべきものとしなければならぬ。

それ程、子供が結婚に對して、重大なる意味をもつてゐるのである。埃太利の皇后エリサベツト殺害の事件が全ヨーロッパを震撼した時に、何よりも第一に私を戦慄せしめたことは、殺害者の告白中、『親なぞそんなものは俺は全く知らない』と云ふ言葉であつたとカイ女史は胸をわくくして言うてゐる。私は既に不良兒を實際の上から二年以上も研究してゐるが、母や父や家庭のない子供が如何に多いかを見て常に痛嘆に堪へないのである。自分達ちの子供はどうかや雨露を凌いでゐるが、そんな物質的生存要件など何でもないことだ。それよりも彼等が自分達ちを兩親とすることが大切なのだ。これが彼等に最も幸福だと、私は親なき不良兒の身の上を思ふにつけて、さう思はないことはない。子

供を見失うてはならぬぞ、さうなるとアノ子供の行末が心配でならなくなる。かやうな親心によつて子供は育つて行くのだ。實に親と云ふものは有難いものだ。併し、人々は殺害者の告白中に親なんぞ俺は知るものかと云ふ言葉をさう震駭し戦慄するだらうか。慈悲の深い種族愛の強いカイ女史のやうに、我々が子供に對する愛情と種族に對する責任感とを有ちうるだらうか。

兒童と家庭 兒童を集團扱ひすると云ふことは能きない。兒童は個別的に取扱つて行かねばならぬ。兒童の社會的な取扱と云ふものには、院内收容と、小屋制 Cottage system と、分散制 scattered home と、家庭委託とがあるが、院内收容も、乃至、小屋制若くは分散制も個別取扱ひにより、家庭的意味を取り入るものたるに異りはない。それで、現今の兒童取扱は凡て家庭的であると云ふても差間はあつまいと思ふ。それ程、現代人は兒童取扱と家庭とを結び付けて考へてゐるのである。然るに、現代社會に於ては、兒童を家庭より遠けるや

うな事情が紛生してゐる。かの、乳兒院とか、託兒所とか、學童預り所とかと云ふものは、勞働婦人に對しての止むをえざる施設として發達して居り、母親より子供を引き離してそれ等の場所に於て保育してゐるのである。近時、我國では託兒所が濫設せられた傾があり、無茶苦茶に施設をつくつて、誇らしげに示すと云ふ氣分がある。それ故に、託兒所を必要以上に發達させる傾向があるのだ。託兒所などといふものは、unavoidable のものとして取扱つて行くに過ぎない。そんなものは無くし得れば、無くした方がよいと云ふ筆法で取扱つて行かなければならぬ。母親が勞働に行くこと云ふことも止むをえざることであるが、また、子供を預けると云ふことも眞に止むるをえざることである。家庭に於て保育し得れば、それに越したことはないのであるが、晝間勞働に行き、職業をとつてゐるので、止むをえず、子供を預けるのである。然るに、我國では、託兒所を濫造し、矢鱈に近隣の子供を集める。大きい建物を造つて、子供を狩

り集め誇つてゐるやうな無自覺なものもある。託兒所では、なるべく、子供は預らぬ方針でなければならぬ。眞に家計上、勞働に従事しなければならぬ者に限り、子供を預つてやるべきである。若し、都合のつくやうになつた時には、直ちに子供を家庭へ戻し、託兒数をへらすがい。然るに、我國の託兒所ではなるべく勧誘しても、子供を狩りあつめ、母親の都合がつくやうになつても、戻してやらず、兎や角、預らうとする傾きがある。そして、子供の数の多いことを以て、施設の繁昌の如く心得てゐるのである。これは、社會事業を商賣として見るものだと言はなくてはならぬ。私は、平素、我國の社會事業は形ちは出来るが、精神や主義や知識が拂底すると痛嘆してゐるのも、斯様な事情があるからである。我國の社會事業には、年々建物は殖えるが、能率はトントあがらぬらしい。恐く、素人の従事して行く仕組みとしてゐる我國の現状であるから、根本方針を立て直さなければ、その弊害は一掃せられぬであらう。

乳兒院の本質 次に、乳兒院であるが、私の定義では、乳兒院とは、三歳以下の兒童を收容し、これに倫理的教育的乃至生理的保育を與へるものだとするのである。獨逸のアウトグスブルグに於けるものは、一歳以下のものを乳兒院に入れ、それ以上三歳までを託兒所に、それより六歳までをキンデルホルト即ち學童預り所に入れる規定である。乳兒院の職分としては、婦人の勞働を助長すること、乳兒に對しては、或は生理的衛生的に、或は精神的倫理的に保護を加るのである。この二つの職分は併行すると云ふよりも、時に、生理的衛生的職分が尊重せられ、時に、精神的倫理的職分が偏重せられる。孰れにしても、乳兒院の職分は教育的倫理的であると共に、生理的衛生的である。バイフェル氏などは、乳兒院の効果絶無なるを主張し、危険なものとしてゐる。けれども、乳兒院は有益な施設とする學者も多く、マルボウ氏は「乳兒院は母親にも家庭にも無くてはならぬものである。そこで、嬰兒は健康を増進し、その生命を保

全する。入院當時とその後とを比較すると、明かに、健康の増進を認むることが出来る。入院後一ヶ月間は不潔で慙むべきものであるとしても、その後にはどうか、確かに有益だと云ふ斷定を下だしうる』と云うてゐる。

この乳兒院も亦託兒所同様止むをえざる施設である。斯様な施設に乳兒を託すると云ふことは勞働婦人や職業婦人にとつて止むをえざるもので、眞に止むをえざるものとして之れを取扱つて行くべきである。下等社會や上流社會では、子供を親の手で育てると云ふことが漸次能きなくなり、また、その義務をつくすことを怠るものが多くなりつゝある。上流社會の婦人達ちは、親としての義務をなげうち、社會的な娛樂や交際に没頭してゐる。芝居や夜會へ出るために、朝から化粧三昧に身を窶し、子供は乳母や守や家庭教師に預け放しにする。斯様な有様で、親なんぞ、そんなものは俺は全く知らないといふ子供が日に増大しつゝある。何と云ふ悲惨なことであらう。蝶よ花よと育てゝもらつても、親

なし子に等しい上流社會の子供の慙むべきかな。かくて、彼等は漸次に不良兒團を肥やして行く。これを、如何にそれ等の婦人は眺めてゐるのであらう。母親といふ觀念はないのだらうか。婦人よりも母親の方が重大だと呼號してゐるカイ女史のやうな見識ある婦人は現代にはないのだらう乎。

婦人と贅澤 こゝに至り、現代婦人の贅澤病とでも云ふべきものを一通り分解する必要がある。現代の贅澤病の分析に關しては、ゾンバルト氏が *Luxus und Kapitalismus*, 1922 贅澤と資本主義) に於て、例の通り、明快なる叙述をやつて居る。それに、例のベブレン氏の *Theory of Leisure Class* (有閑階級論) といふものが贅澤の深刻な分解を完了してゐるのである。この兩著により、贅澤の現象は明白になつてくる。

ゾンバルト氏から初めると、先づ、贅澤の意味の限定をやらねばならぬ。贅澤とは、必要以上に消費することだ。併し、この概念は相對的のもので、何が

必要の標準になるかと云ふことによつて異つてくる。その標準は、或は主觀的或は客觀的である。主觀的標準によると、倫理的美的その他、そのやうな主觀的のものから割り出され、客觀的標準によると、何か客觀的な標準を立て、それから割り出すこととなる。さうとすると、或は人間の生理生活に要するもの、或は文化的必要と云ふものをつぎ出すこととなる。贅澤は二つの意味に考へられる。或は量的に、或は質的に。量的贅澤とは、物の浪費と云ふこと、同意義で、例へば、百人の召使をもつてゐると云ふ類である。質的贅澤とは、精良な着物を使ふと云ふ類だ。この二つの贅澤は融合することもありうる。質的贅澤は物を精良ならしむる方に向ふもので、必要と云ふことから遠かつてゐる。精製といふことは、形ちの上と、素材の上とに發展する。精良といふことも亦絶對的と相對的とに區別しうる。絶對的精良とは、我々の日常使用してゐる物資に關係してゐるもので、生理的必要と云ふものより以上のものたるを意味する。

相對的精良と云ふのは、物的文化の現状より以上たるを意味するので、これは、狹義に於ける精良そのものである。かやうな狹義に於けるものを贅澤品と稱する。贅澤にも、唯心的な利他的なものもあるが、物質的な利己的なものもある。こゝに、贅澤と云ふのは第二のもので、それは個人生活に役立つものである。凡て、個人的贅澤は肉感より生ずるものである。即ち、五官より來る刺戟によるもので、それを物に表現することによりて成立する。そして、これを使用することが贅澤となるのである。併し、凡て感官を刺戟すると云ふことは究極性的生活に關係するもので、畢竟、感官による快感と性慾とは同一のものたるのみ。それ故に、贅澤をやると云ふことは、それを意識するとせざるとに係はらず、性慾に關係させてゐるものに外ならぬのである。富が蓄積され、戀愛が燃えるやうなところでは、自から贅澤の發現がある。その外、贅澤には優勝慾と云ふことが混つてゐる。これはベブレン氏解説の舞臺だ。

自己保存の本能を除いては、經濟的性向より發するものの中、優勝慾が一バ
ン深く強い。實業社會では、この性向は貨幣による優勝となつて現はれる。そ
れは、西洋諸國では、著明な浪費 (Conspicuous waste) となつてゐる。それ故に、
著明なる浪費現象は、生活必需品を差引き、その餘のものを残らずそれに充て
てゐるわけである。貨幣が蓄積さるゝとなれば、それを優勝のため、これ見よ
がしに見せびらかす。神聖と云ひ、美と云はるゝは、孰れも、支拂能力に關係
してゐるものだ。神聖と云ふことは、間接直接の別こそあれ、金によつて、そ
の判断は左右せられてゐる。美と云ふも同じことだ。何が美しいかと云へば、
美學的のものが必ずしも美と云ふのでなく、澤山に金を拂つたものが美となる
わけだ。現代人の美的觀念は美學的のものではなく、支拂能力に關係するもの
である。それは、美學的であつても宜いのだが、同時に、支拂能力の偉大なる
ことを誇示しうる優勝に關係したものでなくてはならぬ。美といふ外、それが、

優勝に役立つに於て、初めて美たりうるのである。そして、これを獨占すると
云ふことが又必要だ。流行と云ふものは、この獨占の現はれた優勝慾の具現だ。
ダイヤの指環は何故に珍重せられるであらう。それは、美的と云ふよりも、寧
ろ、それを箝めてをると、他に優ると云ふ心理によつてゐるものである。即ち
獨占性によるものである。流行の去ると云ふことは、獨占性のなくなること
意味するもので、いかに、流行つてゐるダイヤでも、猫も杓子も箝めると云ふ段
になると、その流行はバツタリすたれる。美なるが故に美なるのではなく、支
拂能力があるから美しいのだ。着物の奇麗といふことも同様で、他人が眞似を
しえないやうな支拂高の多いものに向つて言はれることで、現今の婦人の着物
が眞に奇麗であるかどうかは別問題である。ペブレン氏の論法は四方八方に飛
沫を散らし、かくて、支拂能力による優勝慾の現代的傾向を證明した。この優
勝慾は飢と愛との如く、原始的基本的なものだからして、不可抗な力を以て、

贅澤を示現する。それ故、贅澤は優勝慾のあるところには、どこでも示現されるものと云はなければならない。それが、量的な優勝となると、召使を何人何十人もつてゐるとか、大きな邸をつくつたとか、廣大な庭園をもつてゐるとか、巨萬の財を擁するとかと云ふことを以て、威張ることゝなる。いづれにしても、感覺的な贅澤と云ふものは性に關係あるもので、贅澤のあるところには、性愛従つて生じ、亂淫放埒相次ぐ有様である。富、放縱な亂倫、大都市と云ふやうな條件が揃ふところでは、贅澤な現象が生れるものと云ひうる。現代に於て、斯様な條件が備はつてゐる以上、そこに、信用すべからざる程の虚榮、虚飾、贅冗、虚偽があると云ふことは自から合點せられるであらう。

ゾンバルト氏は現代の贅澤と女とが關係をもつてゐると云ふことを明白に分解した。すなはち、みだらな女の出現によつて、贅澤な現象が生れ、これが又資本主義を起したと論じてゐるのである。して見れば、資本主義の生れたのは

贅澤が與つて力があり、贅澤の生れたのは女殊に亂倫な女に關係があるわけである。

中世の歐羅巴では、男女の關係は宗教的のものであつた。すなはち、男女の結合は神と教會とに奉仕するためであつた。地上のことは天上のことに從屬し、その目的を達するものとして、地上のことがあると解釋されてゐた。それ故に、戀愛と云ふものも切り離して實行すべきではなく、神の認め給ふ結婚制度を以て、男女の關係を實現すべきものとした。それが、地上のものは地上に歸へすと云ふ思想となり、男女關係をも地上のものとして取扱ふやうになつたのは、十一世紀より十二世紀にかけてである。それが、現代の肉官的な地上の戀愛の起源となつたわけである。愛人をこの上ない尊いものとして見たのはその時以後のことであつた。そこで、戀愛の唯心主義が健全なる感官に基く唯物主義となり、感覺の喜悅が新たに發見せられた。肉の解放は性的生活に對し、新たな

る意義を附與し、自然的な肉感に集中した男女關係を開展した。それが次ぎ次ぎに、最初は精練され、それから放埒となり、遂に、亂倫となつた。凡て、文化は竟に自然に還るべきもので、解體、破壊、次いで死滅となるとゾンバルト氏は言うてゐる。結婚と云ふやうなものや、結婚制度といふやうな餘分なものは、眞の愛には要らぬものとせられた。女であつて、かねて妻であると云ふことゝ、綺麗で愛らしいと云ふことゝは全く別のものであると解されるやうになつた。綺麗であり、愛らしい女は、結婚や結婚制度と云ふやうな人爲的なものから何等の輕重を付せらるべきではないとした。愛と制度とは全く別のものだ。と、かう見ることが流行りだして來た。そこで、結婚と云ふやうなことが嘲笑の的となつた。モーターヌの如きは、愛の快美と社會制度たり教會制度たる結婚とは別のもので、愛を追求することは穴勝結婚に到らなくても宜いとし、兩者は全く別のものであるとした。戀愛と結婚とは全く別のものであるが故に、結

婚すると、却つて、愛を殺ぎ、美をにぶくする虞があるとし、結婚することは、子孫を作ることを目的とするが、戀愛を目的とするものは、それ自からを目的であるとした。結婚は戀愛を殺ぎ、戀愛を敗走せしむる、愛することゝ結ぶこととは別の概念に屬すると考へた。こゝに於て、男女の關係は古道具屋のがらくた然たる結婚制度だの教會での擧式だのと云ふやうなものど全く無關係であると云ふ思想が生れ、戀愛は道德や制度を超越するものだとする思想に達したのである。かうして、戀愛を以て戀愛のためであると云ふ放縱の思潮を生み、男女の亂倫離婚及び淫賣が増加することゝなつた。ペトラルカはその時代には離婚がベストのやうに蔓延し、既婚婦人を誑すことが尋常茶番のことゝなつてゐたと云うてゐる。その頃、私生兒をつくることは恥ぢでないばかりか、却つて、誇りとしてゐた。それが、現代の戀愛生活にまで響きを傳へ、結婚前又は結婚生活に於て、性交を弄ぶことを何でもないこととし、それを一種の習慣とした。

これが又淫賣の増加となつて現はれ、都市殊に大都會に於て淫賣が激増した。ブラシエコ氏などの調査に據ると、獨逸では、人口の増加に比例して、微毒化の率が高くなつてゐる。倫敦の淫賣婦の總數は最大の計數によつては八萬人、伯林は五萬人、維也納が三萬人、グラスゴウが一萬七千人と云ふやうなわけで、獨逸の總數約百五十萬人、米國約百二十萬人、日本約六十萬人と云ふことになつてゐる。淫賣婦は多く下等勞働階級より來るもので、その原因は經濟的である。併し、その經濟的原因とは衣食に窮すると云ふやうな單純なことではなく、米田博士はこれを分解して、『直接衣食に窮するために淫賣婦となるものは小數であるが、その主要原因は、つまり、經濟的資力の餘裕のない事、或は収入の少いこと、文化的慾求との關係より起る種々なる事情、殊に収入の少いのに樂な生活、種々なる女子的文化享樂を憧憬する念であると思ふ』と云うてゐられる。かやうな時代の風潮が、歐州宮廷の亂倫となり、風紀の紊亂となり、みだ

りな女性が宮中に入り込み、フランスのルードウキヒ十一世の閨房には、平民の女性が入り込むでゐたと云はれる。宮廷の放縱はやがて民間に廣まり、貴族階級の亂倫となり、それに應じて、淫な女が出現し、次から次へと、芝居やオペラ女と云ふ怪しいものまでが出現した。アルチエンホルツ氏の説では、年收二千磅の英國人が衣食住等生活に費すものは僅かに二百磅で、その餘は、放埒な目的殊に女のために消費するものである。

孰れにしても、女と云ふものが贅澤に關係あるものだとするのがゾンバルト氏の説である。近頃の愛人と云ふやうな女は頗る高價なもの贅澤なものである。早稻田大學へ多額の寄附をした佛蘭西のカーンと云ふ富豪は獨身であつたが、或人より獨身の理由をきかれて、巴里では、到底、妻帯ができぬと答へた。巴里で妻帯するのは困難ではあるが、これは無論生活必需品に向つての費用ではなく、寧ろ、贅澤に向つての費用である。巴里で、女優を圍ひものにする爲め

に、住宅、裝飾、化粧その他の贅澤に對し、一年百萬圓を投じてゐるものは少くない。我國の妾の費用の如きは、これに比べると、殆むど、雀の涙程のものであらう。いくら、富豪でも、一人の女に對し、百萬圓を支出するのは容易なことではない。これで、女と贅澤との關係も明かとなり、女の出現により、贅澤の風潮が蔓延する次第も略合點せられるであらうと思ふ。贅澤は不正な戀愛の正當の子供で、それが又資本主義を生むだとゾンバルト氏は結んでゐる。

院舎と家庭　小供の個性を發達せしむるには、院舎によることは能きなからうと思ふ。人格の自由發達と個人の自由發展とは先づ家庭を豫想する。院舎は兒童に對し、千遍一律な保育と教養とを與ふることを餘儀なくするから、院舎では、十分兒童の個性に向つて注意することが能きない。従つて、各兒童の個性を遺憾なく發達させることは不可能である。そこでは、規則的形式的な教養や取締に流れるから、兒童の複雑な深い感情を保護し、豊富な經驗と動機とを一々

查察して、兒童に適當なる保育と教養とを與へることが能きない。それ故に、兒童の個性を發展せしむるためには、是非共、家庭によらなければならぬ。形式的な規則づくめの兒童教育は、兒童をして、固陋、虚偽、諂諛に陥らしめ、純正な兒童の心理を發達させることが困難である。その上、家庭には、父母の慈愛があり、兄弟の眞情がある。子供は愛に恵れて、育つて行くので、冷酷な環境に生ひ立つことは能きない。院舎には、如何にしても、家庭のやうな温情なく、慈愛がない。院舎に育つと、ごことなく、ひねくれ松のやうな、ねじけたものになつて了ふ。人生の眞相は凡て家庭に映つてゐるが、家庭に成長しない子供は人生の眞相をうる機會がない。男はどんなことをするものか、女は何故に女らしくなくてはならぬか。と云つたやうなことは、凡て、家庭に育てられぬ子供には分らぬことだ。孰れにしても、院舎で育てると云ふことは止むを得ざることである。すなはち、家庭を以て、子供を育てる本場であるとしても、

にはかに、善い家庭が見付からぬから、一時、小供を置くところがなければならぬ、そこで、院舎が要る。餘り悪癖の發達した子供は他の子供と一緒にをくことができない。で、一時院舎へ入れると云ふ必要が生ずる。これ等は、眞に unavoidable のものである。されば、院舎と云ふものが要らぬと云ふのではなくそれは止むをえぬ設備と云ふ程のものとして、解釋してをかなくはならぬ。若し、適當な家庭があれば、子供は必ず家庭により育て、行くと云ふのが原則でなければならぬ。子供は家庭で育てるに限ると云つた方が正しい。それ故に、コツタイヂ・システムだの、スキッタード・ホームなど、云ふ制度が工夫せられたのである。この二つの制度は、院舎と家庭との中間を縫つて通うとするものである。家庭にをくことはできないし、然かし、院舎も困ると云ふところで、一度び、院内へ入れ、更らに、これを家庭化しようとするのである。一つの院舎にいくらかの小屋をつくり、その一々を家庭と見立て、家庭の情味と意味

とを加へようとするのである。分散制度は、更らに、各舎を分散することによりて、悪化を防止し、並せて、家庭としての意義を維持しようとする。かくて、孰れにしても、その目標とするところは家庭で、小供の取扱が家庭を目標とし、家庭によりて、初めて、人として育成しようとする趣向が窺れる。

家庭を要求する兒童の權利 兒童の基本的權利は父母を有つ事、及び、家庭を要求するところの權利である。この二つの權利が兒童の基本的權利であると云ふことは既に縷述したところにより明白であると思ふ。

カイ女史が『兒童の世紀』に書いてある一句、『眞の改革とはストックホルムのアル夫人によつてなされた如きものである。その夫人は社會的公共的事業に與つてゐたものであるが、一週に一日以外は、如何なることがあつても家庭から出ないことにして、その外の招待は凡て斷つてゐた。それによつて、每晚小兒の教養を充分ならしめようとしたのである』と云ふのであるが、これは、正

に現代婦人に對し頂門の一針である。今日の婦人にあつては、家庭外の仕事は非常に膨脹して來た。そして、婦人の活動を要求することが切逼して來た。音樂會、慈善會、演藝會、社交會、何々總會、歡迎會、送別會、同窓會、講演會、婦人會、生活改善會、何々協議會と云つたやうに、次から次へと立て續けて、毎日毎夜出歩いてゐても追付かない。その爲めに家庭は空虚になつてしまつた。子供は乳母任せ、下女任せ、家庭教師任せと云ふことになつた。現代の婦人には餘り社會生活俱樂部生活が膨脹し過ぎたのである。無論、婦人が社會生活をなし、更らに、經濟上、政治上、乃至、文化上の活動をすることが悪からう筈がない。併し、他方、兩親が子供を神聖なものとして見、勿體ないといふ感じなしで眺められぬやうになり、子供の清き神祕な生命に對し義務の感を以て仰ぐやうにならなければならぬと云ふことも動かしがたいことではないか。いくら、社交や俱樂部が大切だからとて、慈善會や演藝會が淑女の資格だからとて、

子供を見捨て、家庭を空虚にし廢屋同然にするなど云ふことは良いことではない。子供は親に對し良く生むで貰ふこと、良く教育してもらふ権利を持つてゐる。父母を持つことの権利や、家庭を要求することの権利は、畢竟、子供がよく育られて行く上に生ずるところの権利である。良く生むで貰ふ権利は未だ世人の了解すみとならない。これ程自明な権利が何故合點せられないか、實に不思議でならない。私はこの眞理に對し、既に數百の論文と數冊の著書を出して、世の注意を喚起して見たが、凡て、無効だつた。赤坊の展覽會だけが生れたと云ふ滑稽があつたやうだ。自分を盲目や啞や曲輪になせ生んでくれたと云つて、兒童の良く生れる権利を主張する時代が來たのに、兩親は今も尙呑氣な氣分で鼻歌をうたつてゐる。結婚は依然として石器時代の遺法を守つてゐる。で、積極的な人種の進化は未だ現はれないと云ふ慘狀である。社會遺傳で文化が進歩してゐるのに、眞實、人間が進歩してゐるかのやうに思つて、嬉がつて

ゐるのである。

併し、兒童の世紀は徐々回轉して來た。子供の愛らしいことも、神祕なことも、勿體ないことも、分りかけてきた。子供は私達ちの所有物でも、附屬物でも、學校でコメツキバツタ然と機を織らすべき筈のものでもない、現世紀は兒童の世紀にちがひない。自分の生むだ子供に反省して見るべき世紀である。また、子供も親に良く生むだかと云ふことを反問する権利のある時代である。ウッド氏は王族の遺傳を研究して、知能と道德との遺傳及び兩者の相關を闡明した。優等な知識や徳性の遺傳を顧みて、良く生まなければならぬと云ふのが、父母の基本的な新道德であるのだ。この新道德のできたことを知らぬ人々は、舊時代のチヨム鬻人問として、現時の文化人となる資格のないものである。一體、世界何づれの國に於ても、父たることを免除されるどころはなく、また、母たることを免除されるどころはない。父や母は當然兒童につくすべき義務がある

のだ。併し、父性とか母性とかと云ふことの條件の中に、良く子供を生むと云ふことが加はらなければ駄目だ。それが、實に、至高の要件であるのだが、現時の父性と母性との條件の中には、この最も大切な要件が欠けてゐるのだ。この最も大切な要件が欠けてゐると云ふことを、現代に至るまで見逃してゐたと云ふことが、人間界の一つの謎である。信すべからざる不思議であるのだ。併し、事實だから仕方がない。林檎が地上に向つて落下すると云ふことは太初以來あつた平凡なことで、今では我々は平凡なこととして取扱つてゐるが、これが、ニュートンのやうな碩學によつて、初めて目鼻がついたと云ふことは信すべからざる不思議である。婦人に人格も心靈もあると云ふことは今日我々は嫌々ながら認めてゐるが、これが百年前の人間には、その最も賢明達識の士にも解らなかつたと云ふことは、さても、不思議なことだ。そのやうに、子供を良く生まなければならぬと云ふことは、漸く、廿年前に解つたとある。何として

も合點が行かぬ不思議な話だ。たつた今でも、それが解らぬ人間が九割九分で、優生學者の多大の勞苦に關はらず、その主旨の宣傳が何等の反響も惹き起さな
いと云ふのはどうした譯か。凡て、譯の分らぬと云ふのが、これ等に對する實狀
である。ゴルトン氏の世俗に訴へた論文が再三默殺されたと云ふことも、現代
人の無自覺無反省を證明するものである。我國でも、かなり、優生學的な努力
は積まれたとしなければならぬだらうが、これ等の歴史が事實として發掘せ
られるのは今後幾年を経なければならぬだらうか、併し、何と云つても、良
く生む義務、良く生むでもらふ權利を主張する時代に入つて來たのだ。兒童の
生命を大切に保護し、教養すると云ふのでは足りない。優生的權利、これが兒
童の基本的權利である。

その上、良く育て、貫ふ權利は既に明白になつてゐる。たゞ、我々がこれを忠
實に實行しないだけだ。兒童を保護し養育し教育する權利を實行することが我

我當面の大問題である。社會活動や文化活動も宜いことには違ひないが、兒童
の養育や教育を放棄してまでも、家庭外の活動に没頭すべきものではなからう。
婦人の最大の責務は兒童に關するものである。父親よりも、母親の方が兒童に
對し、廣き分擔と大なる責任とを有つてゐるだらう。職業や勞働も大切だらう。
併し、子供を放つておいて、職業や勞働に狂奔すべきものではなからう。かう
なれば、兒童の父母を有ち、家庭を有つことを要求すべき權利は、不可抗のも
のとして現はれて來なければならぬ。

然るに、朝三暮四の戀愛や、朝にして夕をはかれぬ蕩兒の戀愛沙汰は、兒童
の父母を有すべき權利や家庭を有つべき權利を剝奪するものである。フェルス
ター氏は、一夫一婦制に對する兒童の權利を主張したが、氏の嚴肅にして眞摯
なる論議は何人も傾聴せぬものはなからう。フ氏は、放埒な男女は兒童を國家
に一任して男女關係に一層の自由を與へ、個人の慾望を満足せしめようとする

ものである。併し、彼等は自分等に向つては、個人主義や人格の自由發展を絶叫してゐるが、兒童に對しては、片手落ちにも、國家の保護を主張し、一様性と非人格性を要求してゐる』と云ひ、放縱なる戀愛を主張するものに對し、痛撃を與へてゐる。自分等の自由や個性や、その發展を強調してゐながら、子供の自由や個性や其發展について與り知らずとなす態度は、まことに不眞面目千萬なものである。フ氏の言うてゐる通りに、子供は國家といふやうな一様性に立つてゐる機關によつて養育さるべくもない。家庭といふ小さい範圍ではあるが、院舎などよりも、遙かに自由と個性とを發達させるに都合のよいところで、初めて兒童は個人性をえ、その創造によりて立派な人格を開發するに至るのである。國家的教育制度によるよりも、家庭に於ける教育は一層豊富な内容と動機と經驗とを兒童に與ふことが能きる。両親が熟練した教育者たるに否たるとを問はず、家庭は最も優れた兒童の教育機關である。それは、如何なる意味に

於ても、最も優れた教育機關だと言はなければならぬ。この最善最高の教育機關を奪ひ去るものが即ち亂倫放埒な蕩兒であり、妻の色香に飽いたとする好新慾の色餓鬼である。併し、世界は回轉しつゝある。そして、兒童の世紀と云ふものを創造しつゝあるのだ。最早、兒童の父母を有すべき權利と家庭を有すべき權利とは拒むことの能きぬものとなつた。

兒童の權利は離婚の場合に於てさへも、それが斷行を躊躇させる。兒童の可愛さと、兒童に對する義務を思ふ時には、離婚は輕々に斷行することの能きるものでないとする思想にも到達する。ビョルンソンは、『母親たらむとする者は、縦し、結婚に對して氣の進ぬものであつても、母親たることには差支へはない。その場合、必ずしも結婚するの必要はない。だが、子供に對し、十分に母親たる義務を盡しさへすれば宜い』と云うてゐる。この子供に對し十分に母親たる義務を盡すことが最も必要だと思はれるのである。それ故に、この兒童觀が深

刻になれば、子供はごうでも宜いとして、容易に離婚の能きるわけのものではない。兒童に對する責任觀は、結婚の齎らす和合が、縦へ、望ましくないものでも、結婚の絆を斷つことを躊躇せしむるであらう。併し、孰れにしても、望ましくない結婚生活といふもの程不健全なものはないのだから、かやうな不健全な結婚を極度に減少しなければならない。和合しない結婚生活からは、第一、兒童が好しくない影響をうける。この影響は時に離婚によつてのみ遮斷さるゝが如きものである。小兒のために離婚した方が幸福であるやうな結婚生活がある。世人はカイ女史の離婚論を見て、恰も、無造作に離婚を奨励してゐるかの如くに思つてゐる。フェルスタア氏もその一人である。が、女史はどこにも離婚を奨励してゐるのではない。寧ろ、その反對が正しい。女史の主張するところのものは、離婚といふことは、兒童に對し、悪影響を與へるから、調和する結婚だけが成立するやうにしなければならぬ、それには、自由が要る、この自由

な戀愛と結婚とにより、初めて、離婚を極度に減少しうるのであると云ふのである。結婚するにも、離婚するにも、第一に考慮すべきものは、兒童とその養育であつて、寸分もこれを閑却することは能きぬと云ふ原則に立つてゐるのである。

兒童の保護と養育とは家庭の破滅を防ぐことによりてのみ達しうる。兒童に對する愛の力によつて、離婚が拘束せられる。愛の力は男女の結合に對し大なる力を揮つてゐる。この愛の力によつて、形式を保ち、兒童の基本的權利を確定しなければならない。家庭の破滅は兒童に取つてはその死滅を意味しなければならない。それ故に、輕々に結婚し輕々に離婚し、その間に生れる兒童の權利を無視するが如きは何より大なる罪惡と思はなければならない。この場合、兒童の幸福の淵源は矢張り人格と個性とその完全なる發展とである。男女が個性とその自由發達に従つて結合することが、やがて、生れ來るべき兒童に對し、

安全な道をそなへるものであり、また、一對の男女の結合により形成さるゝ家庭が、兒童の自由と個性とその發展とを來すものである。兒童の基本的權利を認めることが愛の初めと終とを完うする所次である。かくて、成人の個人主義及び人格の自由なる發展の要求は、一轉して、兒童の個人主義及人格の自由發展の要求となる。こゝに於て、兒童の父母を有すべき權利及び兒童の家庭を有すべき權利が兒童の基本的權利となる。かくて、兒童の世紀といふものが現はれる來る。

第七章 戀愛至上の原理と批判

第一節 戀愛の本質

現今の戀愛學 この章に於て、私は、戀愛の最も高い學問的な斷崖絶壁を攀づるのである。が、充分學問的に戀愛が分析されてゐない今日、これは随分と際

疾い冒険であらねばならぬ。我々は、科學と哲學との兩方から批判闡明して、戀愛の最高峰に登らねばならぬが、私は、リツケルトと、コーエンと、米田博士と、カアベンターと、カイ女史等の與へた光明を通じて、その真相を凝視したいと考へてゐる。リツケルトは、その優れた價值體系論のうちに戀愛を組み入れ、人格的活動の三階段としての、倫理學の範疇、愛學の範疇及び、宗教哲學の範疇に於て、前二者の超越的綜合としての後者に對し、第三階段の前に、内在的綜合として中間階段を立て、これを男女の愛により表現する戀愛至上を以てそれに擬してゐる。米田庄太郎博士の分解は、まことに透徹明快なもので、よく、リツケルトの戀愛哲學を分析し、その眞髓を露出すると共に、併せて、その缺陷をも指摘し、別に一家の見解を立て、ゝられる。(米田博士の著書は『戀愛と人間愛』)

男女特質の意義 リツケルト氏は戀愛の本質を以て、男女の差異と、その

統合にありとしてゐる。米田博士は、リツケルト氏が戀愛の觀念のうち、性慾を含めないのを非として、それに性慾を加へ、矢張り、男女の差異と其統合とを戀愛の精髓としてゐられるやうである。

カイ女史は、男女の差異の統合に就て、『現在に於ては、私はよい正當の理由からして、藝術並に科學が單に、男子のものとして亦婦人のものとしても、現はれないで、その兩者を合せて完全なる人間的人格を發揚するやうにありたいと望むのである。然し、と云ふ意味は、この人格が男子の性質と婦人の性質とを一の共通なる人生といふものに熔し込み、而して、其力を微弱ならしむると云ふのではない。否、そは、斯る一の人格的存在のうち、男子及び婦人の特質が相依り相助けて、各自の總ての力を發揮しつゝ、交互的に、乃至、調和的に各自を主張することを意味するのである。能才の階級のうちでは、私は女性的の男子、及び男性的女子を見出すけれども、天才の階級のうちでは、決し

てそのやうなことはない。此處に於ては、男女兩性の各自が十分に又完全に、他の性の麗はしい屬性を附帶した各自の性特有の性格を保持してゐるのである。』『婦人運動』八〇頁—文明協會譯による)。こゝに、カイ女史は、天才としての男らしき男と、女らしき女とを推奨し、各兩性の特質の大切であるものだと云ふことを説き、男女の特質を一つの共通なる人性に熔し込むのでなく、却つて、男と女とが特異なものとして存在し、相依り、相助けて、交互的に、乃至、調和的に、各自を主張することによりて、人生の高潮に達せむとするものである。さうすれば、女の發展は、單り、婦人の性によつて防げらるゝことなく、その個人的性格を發展せしめ、その社會的地位を進むることを以て完了するだけではなく、人間として市民として解放の後に猶女としての解放が残つてゐることを指示する。婦人が身體上に於て、將又、精神上に於て、女として、母親として、人類の地球に出現せし以來、淘汰獲得した屬性は、これが、男子の身體的

生活及び精神生活に對峙し、婦人の特異なる屬性を形ちづくるのである。婦人の身體並に心靈はその女たることに適合し、その母親たることに適合するものであつて、それは、今日の婦人運動者が考へてゐるやうに、無造作に男の特質とすり換へうるものではないのだ。母親たることが要求する身體上及精神上的の特質は、『女らしさ』の屬性となり、父親たることが要求する身體上及精神上的の特質は、『男らしさ』の屬性となつて、各特異な、そして、豊富な生命をつくるのである。

男女の差異 兩性の差異の如何なるものであるかと云ふことは未だ明かに分らない。リツケルト氏の説と雖も、兩性の科學的研究の結果を缺くと云ふことは明かである。今日、何人が取扱はふが、兩性差異の問題には堅實なる科學的基礎と云ふものがない。ハヴロツク・エリス博士の戰時中に出した論文集 *The philosophy of conflict and other essays in war-time* のうちに收めた『婦人

の精神』と云ふ論文は、最近この種の研究の總收と見てよいものと思ふが、それでさへ、男女兩性の差異に就て、何等根本的に明示するものがない。近時、精神検査によつて、男女の差異を測定し、精確なる結果をえつゝあるやうであるが、(テルマン氏の研究及米田博士の著書に引用されたる猶崎博士の研究の如き)未だ、以て、男女の差異に就ては、我々は何等明確に知りうるどころがないのである。

男女兩性の差異が精確に分らないでも、兩者の異つたものだと云ふことを斷定する程度の材料や根據には乏しくはない。そこで、私は、一方、男女の差異を一々指示し、その精確な説明をすることは、現今の性別學進歩の程度に於ては能きぬとし、他方、ではあるが、男女の各異つたものだと云ふことは既に充分明かだと斷定しようとする。

ハヴエロツク・エリス氏は、一九〇四年に *A Study of British Geniuses* (英國天

才の研究」と云ふ本を公にし、英國の天才について研究してゐるが、同書の十頁より十一頁にわたり、千〇三十人の天才につき、男女の割合を示して、男子九百七十五人、女子五十五人とし、その比率は一八に付一であるとしてゐる。概して、婦人のうちには、男子に於けるが如き偉才は同程度に於て存在してないやうに見へる。たとへ、英國の場合に、ハンナモアだの、モンターグ夫人だの、ソマアヴィル夫人だのと云ふ傑出した婦人があるとしても、それは、多くの場合、婦人だから偉才として取扱はれるに過ぎない。ソマアヴィル夫人の如き、科學界の偉才中に加へられてはゐるが、それは婦人であるからだ。エリス氏は斷つてゐる。やゝ、男子に匹敵しうるのは俳優ばかりである。エリスの婦人天才率は五・三プロセントであるが、キャツテル教授は三・二プロセントに過ぎないとして居る。コラ・キツスル女史の研究に據れば、有史以來、今日に至るまで、各種の天才婦人は僅に八百六十八人に過ぎない。そのうちでも、眞に

天才であるかを疑はせるやうな女性がある。たとへば、メライイ女王の如きは、その境遇や地位のために、偉大なる女性として認められたものではあるが、女王が果して天才であるか、乃至、能才であるかも疑はしいとエリス氏は言うて居る。

ウォード氏はその著、『應用社會學』に於て、遺傳と環境との關係を明細に究明し、境遇を以て才能を發達せしむる重なる契機としてゐる。そして、環境を七つに分ち、物理的環境、人種的環境、宗教的環境、地方的環境、經濟的環境、社會的環境、及び教育的環境として居る。ウォード氏は文明の原動力としての環境とは何ぞやの問ひを掲げ、これを論究するには、これ等の要素を分類し、その各要素につき討究しなければならないとしてゐる。ヅ・カンドル氏はウォード氏に書簡を送つて、『予の研究の結果は、環境は天性よりも重要なもので、いづれの國にも、科學者の産出に都合のよい原因が十九あるが、遺傳はそのうち

の一であるに過ぎない』と言つてゐる。そして、ヅ・カンドル氏の天才を産出すべき二十の環境とは左の如きものである。

- 一、有福な人が窮乏する人よりも、比較的に多いから、有福と云ふことが天才を産出する一つの原因でなければならぬ。
- 二、有福な人のうちに、比較的營利に遠かつた知識的活動をするものが多い。
- 三、眞理愛求の思想及感情の長時期の習慣。
- 四、營利的ならぬ知識的探究に興味をもつ外國人の移住。
- 五、科學及知識的職業を助長するが如き傳統を有つ家族の多く存在すること。
- 六、初等教育中等教育及び高等教育が政黨及宗教の外に獨立して學生及教授の研究を鼓舞し、かつ自由であること。
- 七、圖書館、觀測所、實驗所、材料蒐集等科學的設備の整ふこと。
- 八、民衆が想像よりも眞理に對して興味をもつこと。

九、科學的研究の結果を發表する自由。

一〇、科學者及研究者に有利なる輿論。

一一、いづれの職業にも従事しうる自由、旅行の自由。

一二、信仰の自由。

一三、自己の屬する團體内及一般公衆の教育に對し親切なる僧侶。

一四、獨立の制限なき僧侶。

一五、英獨佛語の普及。

一六、小獨立國又は數個の小獨立國よりなる聯邦。

一七、溫帶と熱帶。

一八、文明國に隣接すること。

一九、學會の多く存すること。

二〇、旅行特に外國に滞在する習慣あること。

エリス氏が男子と比肩しうるとした劇壇には、サラ・ベナールや、ジドンロや、ラーセルや、レストリヤ、デューサーなどの傑出した婦人がある。科學界には、婦人は極めて少ない。婦人は殆ど今日まで科學界よりしめ出しを喰つてゐるかの如き觀がある。キューリー氏はソルボンヌ大學教授であり、ラヂユームの發見者で、數多の科學的概念に改革を加へたが、その夫人は夫の協同研究者で、秀抜な科學者だつた。夫の不慮の死後、夫の地位を繼いで、大學の講師となつた。バツサー女子大學の天文學教授マリア・ミツチエル女史は優れた天文學者で、兼ねて、數學者であつた。前世紀初半には、メーリイ・サンマーグイといふ婦人があつて、數學や科學の著作をした。この婦人は近代のヒバシアと稱せられた。文學の範圍で婦人は男子に匹敵しうるのは唯小説だけである。サツフォオーはホーマーと匹敵すべき女詩聖であつた。今日に残つてゐるものは斷片に過ぎないが、第一流の抒情詩人たるは文藝批評家のあまねく一致すると

ころである。ヴェットリア・コロンナは女詩人として知られた有名な婦人であつて、ミケランヂエロと交友があつたので名高い。現今に於て、女詩人は到底男の詩聖に比べうるものではないが、ブラウニングや、インジエローや、クリスチーナ・ロセツタイなどは孰れも名高い女詩人である。マダム・デスーエルはルーンに匹敵すべき論客であつた。女の傑出した部面は詩でなくて小説であつた。クールブレールは一七八八年にその處女作『エベリナ』を出したが、高評噴々たるものであつた。シエレイ夫人は二十歳前、既に、靈妙な文才を發揮してゐたが、その後、大作『フランケンスイタン』を書いた。サツカレイが男子の作だとして賞揚おかなかつた『僧侶生活』はエヴァンス嬢の作であつた。スタウ夫人の『黒奴トム物語』は廣く讀まれて、人道的使命を完うした傑作である。その他、オーステイン・ブロンタイ姉妹、ミューロワイ嬢、ホワートン夫人、マーガレット・デランド、マーフリー嬢、フリーマン夫人、アサートン嬢等傑出した婦人作家

が現はれ、婦人のために氣焰をあげた。繪畫の世界では、マダム・レブランや、アンジェリコ・カウフマンや、ランドシーアを凌駕すると云はれたローザ・ポーナアが出た。音楽界では、婦人は概して作曲に不得手で、歌手として彈奏者として成功したに過ぎない。女彫刻家のうちには傑出したものは殆むど見出すことはできない。

婦人の傑出したものは、各種の世界を通じて、實に、寥々たるものであつたと思はざるを得ない。その眞に傑出したものと雖も、鳥なき郷の蝙蝠といふ意味に於て、優れてゐると云はるゝに過ぎない。現今、我國の女流作家や女論客を見渡しても、つまらぬ男子にさへも、太刀打ちの能きるものは少く、女詩人と云ひ、女小説家と云ひ、數は少いが女論客と云ふものも、それは女だからと云ふので、世人が堪忍するにすぎない底のものばかりである。この外、何の意味もないであらう。これと同じ意味で、天才中男と比べてつまらぬものでも、

鳥なき郷の蝙蝠として、女だから珍重し稱揚し、天才として持て囃すのである。

併し、何故に、婦人が男子に劣つてゐるかの説明は、環境を主とするものと遺傳によるものとの二派があつて、一致してゐない。環境を主とするものは、男女間の身體的精神的差異は、凡て歴史的進化の結果で、境遇によるものであり、社會的境遇の異なることによりて起つたものであるとするのである。今日の社會は男子の造つたもので、男子の活動に都合のよいやうに能きてゐるものである。法律を見ても、政治や、經濟を眺めても、學問をしらべても、孰れも、男の香のついたもので、マンメイドたる外何ものでもない。婦人に對しては、未だ、文化上の機會均等と云ふものは樹立されてゐないし、政治上では、普通選舉であつても、女は未だしめ出しをくつて居り、經濟上に於ても、勞働や職業には平等なる權利が樹立されてゐず、不平等なる勞働條件の下に男女は各別に働いてゐる。歴史あつてこの方、斯様な不平等や壓制で續いて來たので、

女子の現状を以て、女子そのまゝの能力を發揮したものと見ることはできないであらう。女子の能力がどんなものであるか、更らに、女子そのものが如何なるものであるかと云ふことは、未だ現代人には分つてゐない筈である。オリバア・ジュライネル女史は婦人の職業はひとつひとつ男子により取り上げられてしまつたので、今では、婦人の職業らしいものとして残つてゐるものは、唯賣色の一事あるのみであると痛嘆して居る。斯様なわけで、文學、科學、政治、宗教等凡て、婦人の出場して、實驗濟になつたものは少なく、婦人がこれ等に對し、如何なる能力をもつてゐるか、將又、如何なる才能を示すかと云ふことは、一切分らぬと見るのが當然である。職業や勞働にしたところが、婦人に能きない勞働や職業があるかと云ふことは豫感に於て分るものではない。婦人は正直で、義務の觀念が鋭敏であり、秩序正しいと云ふので、郵便や、電信や、電話や、鐵道や、商店や、銀行や、會計係、祕書係、商品係、荷渡倅等に備は

れるやうになり、また、寫真業や、旅館や、寄宿業では、婦人は大なる成功を収めた。女醫者、女辯護、女教員と云ふものも、日々増大しつゝある。アメリカでは、屠殺者や死刑執行者や投機師までも女がやつてゐるさうである。

かくの如き現状であるから、女の仕事として、何が適當でないかと云ふことは、豫斷では言はれないわけである。永い精しい實驗を積むでからでなければ、女の職業上の分業は分らぬと見るのが、當然である。郵便や電信や鐵道には、歐米では勿論、我國でも女を雇つてはゐるが、これが、女として適當な職業であるかどうかと云ふことは未だ實驗すみにならない。我國では郵便や電信に女子を使用せし以來、その成績の優良な點のみを列擧する傾向があつたが、現今では、必ずしも、女事務員がよいと云うてはゐない様である。歐米では、既に郵便、電信には、女子は男子よりも優れてゐないと見る傾向が生じ、いろいろの制限や條件を設け、それ以内で、女子を備用するやうになつて來た。さうい

ふわけで、一つの事業なり事務なりが、女子に適してゐるかどうかと云ふことは容易に分らないのである。殊に、女子は永い間、社會より隔離され、男のつくつた社會に住み、唯だ一つ家庭によつてゐたので、一タイ、女子の本質がどんなものかと云ふことは未だ分らぬ筈である。女子が文化上、男子の貢獻に比して見る影もないものとしても、今日までの女子の成績をもつて、女子そのもの成績と見ることは絶對的にできないであらう。して見れば、女子はどんなものか、またどういふことが能きるか云ふことは殆むど不明であると云つてよい。男女の優劣などを今に於て論ずると云ふことは随分と馬鹿げたことだ。男子は一通りその能力や本質をさらけだしたとしても、婦人はその能力と本質とを闇に葬つてゐる。この兩者を比較するとすれば、明いものと暗いものとを比較することになるだけだ。かやうな不合理な比較の標準に立つて、男女の優劣を論ずると云ふことは實に馬鹿げたことだ。男の世界と女の世界ともなし、

男女統合の文明と云ふやうなものを造くり上ぐるに至らば、自然、婦人の本質も明かに開發せられやう。その時、初めて、男女の差異と優劣とも分るであらう。男女には優劣はないとしても、差異は必ずあるだらう。併し、いづれにしても、その時に、男と女との本質が明瞭にならう。カイ女史は『古代に於ては婦人は心靈の偉大さと、公民的徳義といふ男らしい性質を呈露した。中世に於ては、婦人は神聖と戀愛活動とに對する男女同様の能力を表示した。文藝復興期に於ては、婦人は己れ自身の人格を生きた藝術に鑄込むと云ふ點に於て、男子同様の力量を表示した。』と云つてゐる。かくして、婦人の人間社會に努力貢獻する幕が、次から次へと開かるれば、婦人と云ふもの、本質も貢獻も初めて明白になるであらう。

私は既に男と女との本質は充分明白になつてゐないから、今に於て、男女の差異を事細かしく決めることはできないが、男と女とは差異あるものだ云ふ

ことだけは充分言はれると云うた。尙ほ、私はこの斷言を翻がへす必要を認めない。今日、女の示してゐる性質や能力は、歴史的のもの、社會環境によるもの、乃至、マンメイドの世界で開發したものであると云ふ外何ものでもない。それでも、女子が男子に異つたものと云ふことだけは明かである。婦人のうちにも、各種の天才はあるが、その數は少く、その程度に於ても單に『女であるから』と云ふに過ぎないやうなものである。併し、如上の原則に照らして、女天才の現状を見れば、一つには、それは社會的歴史的な産物で、男の造つた世界であるがために、婦人の才能を充分開花するに至らずして、空しく枯死したと見ることができやう。それがために、女天才の數と云ふものも、當然現はれなければならなかつた數以下に切り下げられてゐると見るべきであらう。ではあるが、男と女とは差異はないとか、また、差異があるかどうか未だ分らぬと云ふやうなことは言はれまいと思ふ。今日まで、婦人の示現してゐる實蹟か

ら見ても、男と女とは異つたものだと云ふことだけは動かしやうもないであらう。

エリス氏は、女の天才が男の天才より少いと云ふことは環境によるものではなく、それは、『内』から出て來るものだとして *it is an intimate secret of structure and mechanism* (それは構造と機構とに屬する奥祕に因る) と斷定してゐる。エリス氏は天才といふものを機會によつて説明するのは、まづい仕方だとして、天才は機會と境遇とのわるいところでも同様に榮えるものだと云うてゐる。これは半ば眞實で、半ば誤謬である。エリス氏とウォード氏とを混ぜ合せたものが寧ろ正しいと思ふ。天才は機會や境遇に制せられるものだとして、スペンサア以下の天才を以て、研究の餘暇のあつた幸運によると考へ、スペンサアなどの生活は有福ではなかつたとしても、伯父の死亡により數萬金の遺産をえ、それで綜合哲學を出版し、學術界に名聲を轟かしたのだとするウォード

流の論法は誤つてゐないであらう。併し、エリス流に、天才は縦へ機會がなく境遇が悪い場合でも、その才能を發揚するもので、寧ろ機會や境遇の悪い方が却つて刺戟となること云ふ考へも亦正しいと思ふ。これ等の精細なる論議は拙著『日本人種改造論』や『興國策』としての『人種改造』に譲らう。

さて、併し、機會や境遇がなくても天才は開發するものだとする方向のみを辿らう。婦人科學者と云ふものは男のやうに多くない。物理學者も、化學者も、文學者も、生物學者も、法律家も、政治家も少い。これは、マンメイドの社會のためだとしても、さきの論法により、それは又婦人には科學の才能が乏しいのであるとすることも能きやう。政治家が婦人のうちに少く、大政治家と云ふものは極めて少いとしても、それは政治家になり得るものが婦人の中に少かつたことを意味しないであらうか。天才は、天性、世に冷淡なもので、孤獨を好み、放縱不羈で、世と相容れずそれと争を續くものだが、斯様な天才は普通人

の克くなし得ないところをなし、困難や障害を突破し、死線を越えて彼岸に達してゐる。男の天才のうちには、機會も境遇もないのに、よく、目的を達し成功したものが多し。カーライルは、初めの著作を出版するために倫敦市中を迂路付きまわり、一時目的を達しないので、失望落膽したし、カアペンタア氏の處女作も最初不遇であつたが、その後極めて好遇で、好評嘖々、雷名世界に轟く有様だつた。これは、どう見ても、才能は機會や境遇によつて妨げられるものではないことを證明しようと思ふ。實は、機會をつくり、境遇を開拓しながら、進むで行くのが、偉人の常道である。機會や境遇が非なるがために失望したり、落膽したり、乃至、敗走するのは凡人や愚人の常狀である。エリス氏は、偉大なる女優だつたマドモワゼール・クレエロの例をひいて、婦人に比較的順潮であつた劇界と雖も、峻阪を経、難路を突破して、初めて、成功するものであることを示した。クレイロンは七ヶ月目で生れ出た月足らずの子供で、小さ

く弱かつた。その上、母親は無學な迷信家で、氣の荒い女であつた。クレイロンは何一つ教へられるでもなかつたが、その當然行くべき女工生活に對し挑戦した。室へ閉ぢこめられ、職業としてはなく、椅子の上に立つて、外を眺めると、不思議なことには、向ふ側の家に女優が陣取つて稽古をしてゐるのが見えた。それが、クレイロンの女優志願の初めだつた。勿論、その後、幾多の艱難辛苦と戦つて、遂に立派な女優になり上つたのである。アマンダ・ナトロープの調査によれば、アメリカで名をなした九百七十七人の婦人の中、たゞの一五・五プロセントだけが高等教育をうけたに過ぎない。キツスル氏の研究の結果によれば、近代よりも、十八世紀の方が婦人成功者の數が多かつた。これは、英國でも、佛蘭西でも、獨逸でも、同様であつて、たゞ、伊太利が例外たるに過ぎない。これ又、機會や境遇が偉大をつくるものでない證據である。偉人や天才は造るべきものではなく、生れるものである。私の先著には、その例證を多く掲げて

ゐるが、今後、公にする積りである『血統と結婚』なる書物に於ても、かやうな資料を多く載せる考へである。

機會の均等と云ふことは現代人に取つて大切なことであるが、それが萬能藥でも手品師の魔杖でもない。無より有は生せず、能才はたゞ生れることにより現はれるだけである。それ故に、機會の均等と共に、能力の問題に注意しなければならぬ。能力のある男女が生れるれば、たとへ、機會と境遇とは、今のやうに不均等であつても、才能を發揮する機會は必ず多くなるわけだ。エリス氏は人間の兩極端なる天才も白痴も二つながら女よりも男のうちに多いが、この兩極端は思つた程人間界に實際の必要なる問題ではなく、寧ろ、兩極端の間にある中間階級が重要であると云ふ意見で、この中間の男女の差異如何を問題の中樞となすべきであるとしてゐる。私は、これから、男女問題について、世界の權威たる氏の間階級の差異についての説を引用しようと思ふ。

斯様な中間的男女を調べるとすれば、學生や各種の職業に従事する男女を調査することになる。しかし、この調査を精密に遂行すると云ふことは困難である。たとへ、男と女とが同一の職業に従事するとしても、てふど、同じ仕事をなし、同じ状態にあると云ふことは少いから、そこに、彼此比較するに困難なる事情が生ずる。殆むど總ての職業に於て、婦人の夜業は好しくないとし、勞力を要するやうな仕事は婦人に向かないとしてゐるために、男女の差異を比較することは能きない場合がある。例へば、郵便局や電信局に働いてゐる男女の書記であるが、男も女も同じやうな仕事をしてゐるやうに思はれるであらう。併し、實際は、男と女との仕事は異つてゐるので、兩者を精密に比較することは困難である。それ故に、男女の差異に就て疑ふべからざる結論をうるに云ふ事は至難と言はなければならぬ。結局男女の差異に就ては係員の意見を徴する外ないこととなるが、それは單に一般的なものので彼此平均した意見と云ふこと

になり、略一致した意見を集めうるに過ぎない。併し、これは永く男女共使つてゐたところの場合で、女子の使用がこれから初るところでは、女子に關する意見は次のやうなものになるであらう。最初の意見は、いつでも、女子はその仕事に不向きだと云ふ類で、否定的の態度である。愈々、女子を使用することになると、前とはうつて異り反對となり、女子は男子よりも役に立つと云ふ他の極端にいつた肯定的の態度となる。これと同一のことは戰時中、英國の果實採集に關して起つた。最切、農夫は女子にはその仕事は適しないと云うてゐたが、戰時中、勞力が不足して仕方がないので、嫌々、女を傭ひ入れることとなつた。さて、使用して見ると、今度は女の方が男よりも、役に立つと言ひ出した。かゝる場合、男女差異の比較は知能と云ふことではなく、たいていは、兩性の基礎的な熟練及び技能といふことを標的とする。それは明かに識別認知し易いからである。この類のものは、男子の筋肉が發達してゐるとか、力量があ

るとか、婦人には週期的故障があるとか、婦人は結婚までの勞働であるから一般に氣乗りがしないとか、第一雌雄性の異つてゐることから來る相異とか、男子の攻勢的の態度とか、婦人の母性とか、男子の社會活動に對し婦人の慈善的な行爲とか云つたやうなものである。斯様な差異は疲勞の外、知能測定に對し有效なる標準とならぬもので、また、熟練及技能は、ある時ある所によつて、随分婦人にも男子同様過激なる勞働を遂行しうることもあるので、何とも豫斷が能きかねるのである。男子の従事してゐる職業のうち、婦人がたえて従事しないのは兵士であるが、戦争は精確には職業と云ひがたいであらうとエリス氏は言うてゐる。

斯様な困難があるけれども、男女差異の比較は近時科學的に研究されてゐるのである。その中でも最も優れた研究は和蘭のグロニンゲン大學でヘエマン教授の行つたもので、その結果は、*Die Psychologie der Frauen* (女の心理) と云

ふ著書となつて公にされてゐる。ヘエマン教授は熟練な科學者であつて、偏見のない人であり、かつ、男女が殆むど同じに暮してゐる土地に住つてゐるので都合がよい。教授は質問法を採り、和蘭國內の醫師に質問を送つて、回答を求めた。この方法は疑問づきのものだが、ヘエマン教授は誤謬を避けるやうな手段を講じた。質問を送つた醫師は男子であると共に女子であつて、各々その性に從つて回答することゝし、それを百分率となし、容易に比較することが能きるやうにした。かつ、偏執があれば、容易に發見することが能きるやうにした。これに基き、ヘエマン教授は斷定を下したのであるが、その結果に據れば、女は男よりも感情性 (greater emotionality, affectability) だ云ふのである。この結論は、男の觀察者よりも、女の觀察者の場合に於て著明である。これによつて考へると、感情性に關係するものは、好ましいと好しくないに關はらず、凡てそれに關係をもつ。總ての精神的道德的、乃至、その他の性質にして感情性に關

係あるものは凡て男子よりも女子に於て發達する。これは、永久的にさうであること云ふのでなくともよい。ヘエマン氏はこれを基本的なものと解し、教育や種族的經驗に基いて、男女の差異を説明することを蔑視してゐる。それ故、氏はスタインメツに従ひ男女の差異が文化を決定するのであり、文化により男女の差異が決定せられるのではないと見てゐる。併し、基本的の差異と雖も、雌雄淘汰の影響をうくるもので、男はその要求によつて女を鑄造し、女は又その希望に従つて男を鑄造するのである。かくて、男女の特質は雌雄淘汰によりて變化する。即ち、男女の結合と結婚とが隨意その特質を變化するのである。

學校で、男女の差異を研究するとすれば、同じ境遇で同様に勉強してゐるものを調べるので、信賴するに足る結果がえられるわけである。と、かやうに、何人も豫想するであらう。獨逸や米國では、この豫想に基き、學校で男女學生の心理的差異に就て多大なる實驗を積むだ。ところが、そこにも、一樣な誤解

と謬想とがある。今、女子の身體上及精神上の早熟と云ふことに例を取らう。早熟と云ふことは、今日、文明國に於て多大の實驗が積れたばかりでなく、自然民族の間にも同一の現象がある。かく、早熟は一般女子の通有性たるが如く、また、この通有性は確實のもの、やうにも見へる。併し、綿密に調べて見ると、この通有性も確實とは云はれない。女子には子を生む職分があるから、この職分に堪へるために、自づから、女子をして早く成熟せしめなければならぬとする要求がある。この後天的な要求が女子をして同年齡の男子よりも伶俐で早分りがするかの如き姿態をとらしむる。こゝに於て、女子は男子よりも早熟だと云はれることになる。なる程、女子の早熟は事實だが、その早熟たるや生來のものではなく寧ろ後天的のもので、訓練や教育によつたものである。これが、男女の自然的差異に基くもの、やうに考へると云ふことは早計でなければならぬ。その上、學校の實驗は成人を研究の對象とするのでないから、若き男女は

たとへその時同じであつても成長に従つて差異を生ずる事なきを保しがたい。例へば、男子は女子が發達を停止した後でも進歩するものであるが、數學の如きは、最初、女子の方が急速學力が上がるが、その後男子の方が優秀となり、畢竟、數學は男子の方が勝れると云ふことになる。

男女の根本的差異に就てはかうも言ひうる。女子は感情性に長じているが、それがために、恐く、それと相關してゐると思はれる分析に短である。これに反し、男子は一般分析に長じ、判断と推理とに優り、數學に勝れてゐる。その他の點に於いては、在學中の女子は男子と同様であり、或は寧ろ優秀である。學校では、女生は同年齡の男生よりも、一般的知能に於て優つてゐるやうである。女生は多くの場合、男生よりも、記憶力が發達してをり、それがため、女生は學科の成績概して男生よりも優良なる傾きがある。これは、學校の學科は記憶の良いことによつて成績の優良となるやうなものであるからである。その上、

女生は學修に忠實で、出精するやうに見える。併し、女生の有つてゐる如上の資格はより廣い社會に於て、必ずしも成功を齎らす要件とはならない。レオシイア・モース氏に據ると、黒人の子供は白人の子供よりも記憶力はあるが、判断及推理力は、寧ろ、その反對である。それと同じく、女子は男子よりも記憶に勝れてゐるが、判断や推理には劣つてゐる。また、ジエネバのイヴァノフ氏が見出したやうに、成功に缺くべからざる特種の技能や才能は一般的知能や出精といふことと相關してゐるものではない。かやうに見てくると、必ずしも、女子の有つてゐる特殊な心理的要件が社會に於ける成功と一致するものではないと云へよう。

現今の知識及び研究の程度では、男女の差異に就ては、エリス氏の總括したもの以上に何にも分らぬと云うて宜いであらう。併し、それは、孰れにしても、甚だ不満足なるものと云はなければならぬ。たゞ、我々はこれ以上、性別の知

識を有つてゐないので、しばらく、これによつて立つと云ふの外はないのである。そこで、私は、初めに示しておいた斷定を矢張り最後に繰り返へすことゝする。男女の差異はまだ明確には分らないが、併し、男女に差異の存すことは確實疑なきことである。これが、私の男女の差異に關する結論である。

第二節 戀愛至上の本質

性的差異と結合の意義 一八一八年、ベンジャミン・キッド氏の *The Science of Power* 云々遺著が出たが、この本は私に取つては大切なもので、私に深き影響を與へたものである。私はこれにより少からず暗示をうけ、思想の系統を整理する必要を感じ、また、私の豫ねて懐抱してゐた思想を立て直す機縁となつた。私はキッド氏の思想を辿つて、私の男女觀、その文明及文明史に對する見解を立て直し、戀愛論に一つの組織を與へた。その後、私はカーペンター氏

の『愛と死』とを讀み、カイ女史の『婦人運動』に接し、近ごろ、リツケルト氏の名著『哲學系統』を讀み、更らに、最近、米田博士のリツケルトの戀愛論を分析し、更らに、自説を述べられた『戀愛と人間愛』とを讀み、六年前、キッド氏の書に接して與へられた印象をこゝに集結することができた。かくて、私の戀愛論も成立するに至つたのである。併し、私はこゝでは主として現代人の戀愛思想を取り扱ひ、これを分析批判するので、私自身の戀愛論を述べることは能きなからうと思ふ。これは、切り離して、別の著書に於て、見參する考へである。

キッド氏は今後の文明の中心力は男の爭鬭力ではなく、婦人の力そのものであるとし、婦人にあつては、個人よりも種族を基準とし、現在よりも將來を重しとしてゐると云うてゐる。この婦人の力や理想が、現代以後、人間界に出現し、それが男子の文明や理想に融合されることにより、初めて完全なる文明が

できるのである。今日の文明はマンメイドのもので、一般的の文明ではなく、男性文明と稱すべきものである。この男性文明に包圍され窒息させられてゐるのが、今日の婦人である、否、代々の婦人は斯様な有様で生きて來たのである。それがため、文明は凡て男の造つたものとなつた。何故、男が造つたか、男に造らしたかと反問するものもあらう。その答へは、それは、男が造る力量があつたからと云ふ外にはない。それなら、適者殘存の理で、仕方がないではないかと云ふであらう。更らに、それは自然淘汰で進歩したことになるのだと云ふかも知れない。併し、淘汰されたものが穴勝人類社會の進歩なるものでない。たとへば、今日、我々のあきくして居る經濟能力の淘汰作用或は寧ろその破壊作用を以て、人類の進歩上望まじき能力と考へるものはなからう。經濟力は道徳と一致しないと云ふのが今日の實狀である。惡徳な冷血漢が寧ろ富者になりうる資格のある世の中である。それでも、惡徳な富者が適者として殘存するは

致方なきこと、また、望まじきことと言ふものはないであらう。それと同様、男が造る力量をもつてゐたので、今の文明が能きたと云ふこと、それが望ましいこと、云ふことは穴勝合致するとは限らないであらう。これに就て、幸ひ、米田博士の明快なる論述がある。米田博士は云はれる、「併し、長い歴史的時代の間、女子が劣つてゐるからである」と云ふ説も立てられる。されど、此處にも亦注意すべき事情がある。夫れは今日までの人類の歴史的發達は主として武力腕力を基礎として、行はれてゐたと云ふ事である。而して、武力腕力に於ては、女子は男子に劣つてゐることは、疑はれない事實で、遠き將來はイザ知らず、近き將來に於ても、女子は武力腕力に於て、到底男子に優ることはできないと思ふ。但し、是れは勿論全般的に見て言ふのである。要するに、人類の歴史的發達は、女子が男子に劣る方面を、その主要なる基礎として發達して來たので、而してそれが爲めに、女子は男子に支配せられ、男子と同様に文化の

發達のために、自由に活動することが出来なかつたのである。されば、かゝる事情の下におかれた女子の歴史的發達の事實によりて、女子の永久の本質を發明することは、到底出来難いと思はれる。論理的に立てられたる女子本質説が、かゝる歴史的事實に適合して居るからとて、或は夫れによりて證明されて居るからとて、吾人は其の説を直ちに正當と認めることは出来ない。歴史的事實として、女子の文化的作業が男子に劣つても、夫れが爲めに、直ちに女子の精神力が男子の夫れに劣つて居るとは論斷され難いのである』(『戀愛と人間愛』三八七―八頁)。男の造つた文明、また、男の造る力を有つてゐた爲めに出来た文明としても、その文明とその文明の意義が理想的のものと云ふことは能きるものではなからう。偶然、男が腕力に勝れてゐたと云ふ單なる事實によつて造つた文明の非文明であるのは、富者が經濟力をもつてゐたと云ふ單なる事實で出来た不完全な今日の文明と同一である。經濟的文明が終局のもので、理想の

究極に達したものは、何人も思はないであらう。それと同様、男子が腕力によつて造つた文明が必ずしも合理的なものとは考へられぬであらう。この男子の腕力によつて出来た文明が即ち男性的文明なのである。この男性的文明と女性的文明の性質に就てはキッド氏は明快にその遺著『力の科學』に述べてゐる。私は、この男女兩文明の結合によりて、一層高い文明としての統合文明なるものが、生れると考へるのである。それと共に、男と女との本質の結合として、一層高い個人と社會生活とが現はれるであらうと思ふ。

今日よりも、一層高い個人と云ふものが、將來の個人じゃらねばならぬ。今日よりも明日一層優れた人格を示さねばならぬ。現今では、個人も人格も圓滿なものではなく、また圓熟の程度に達したものもない。それは、圓熟することの能きない状態におかれてゐるからである。圓滿な個人と人格とは、男女の特質が抱合し相合して造るところの統一的なものである。完全なる個人と人格と

は男女の合一を豫想し、また、それを條件とする。それは、即ち、ビョルンソンの『自分が二倍になつたと感ずる愛』そのものゝ成果である。完全な想思の愛は二人の戀人が相合して一人となり、各が自由となつて、最大の完全にまで發達するところのものである。戀なくては、人間は完全なる人間となれぬのだ。愛なくては、文明は統一的な完全文明になれぬのだ。蓋し、統一的文明と云ふものは、恐く、未だ現代人が殆むど了解しえない深き高い意味をもつてゐるのであらう。それを完全に了解してゐると考へたり、また、それが何の意味もない平凡なものと思つたり、乃至、それは偏癩の産物であると誤解してゐたりするなど、現代人の理解や理想は實に散々な目になつて敗走してゐる。男のつくつた文明と云ふものが完全な文明に到らないことは、男だけで、完全な人間になり得ないと同一ではないか。二倍になると云ふことは、男と女とが、銘々に各自單獨でやれることではない。それと同じく、二倍になつたと感ずる底の

文明は統合的なもので、男と女との特質の融合した文明でなければならぬ。

今日まで、何故に、完全な圓滿な個人も人格もないか。それは、男女が本質的に異つてゐる特質の差異によつて、自分を完了するところの戀愛により、また、各自それ〴〵他に依存して完成しないからである。依存と云ふことが解らないやうな人間は、ビョルンソンの二倍になつた戀愛も、カイ女史の所謂完全な相思の愛は二人を全く一人として各を完了する所以も、リツケルト氏の男子は女子に對する愛によつて不終結的全體と完全終結的特殊とを統合して内在的統一に到り、兩者を統合した完全なものゝ云ふ意味も解らないであらう。男子はその固有の不終結的全體から完全終結特殊に向つて統合を了し、女子はその固有の完全終結的全體から完全終結特殊に向つて統合を了する。リツケルト氏にありては、男子の本質は一般に將來的仕事に適し、殆むど完全に終結しがたき貢獻に向つて努力してゐるので、自から靜かに獨り樂む現在生活に居

る女子との結合により満足を見出さうとする。女子の満足はそれを反轉したもので、狹隘で限定的な生活より、男子に依存することによつて、將來の無限なる努力に参加しようとするのである。こゝに、男女依存の意義は明かである。カイ女史の『戀愛なしには結婚は不道德である』と云ふ意味も明瞭である。男女の差異が各他をして依らしむる限り、個人の完成を來し、リツケルト氏の內在的統合に到るのであるとする場合、初めて結婚は有意義であり、かつ、道德的であらう。

更新と接觸 更新と云ふ生物界の事實は、男女の差異による依存に光りを投げ、意味を附與するものであるやうに思はれる。結合は種族の保存及成長にとつて不可缺の要件であるとするモーバ氏の斷案は、生命の存續は精分の微妙なる交換によるもので、その精力の交換は生命の更新となると云ふ意であらう。カーペンター氏は、この生物學的原理を人間界に適用し、男女の關係を説明し

てゐる。氏は更新作用を以て、生殖作用より基本的なものとなし、それは生殖をほんの一部門にするものであると云ふことの外に、更新作用を含むで居ると言つてゐる。さうすれば、更新や補足がなければ、性慾も、愛も、生殖も、種族保存もないと言つて宜いわけである。これ程、人間の自己保存と種族保存とにとつて大切なものが更新である。それには拘はらず、これが、男女戀愛の上で、人類の注意を逸してゐたと云ふことは不思議である。男と女とが更新し補足するのは、その靈妙なる精分の交換に因る。男女の結合、その戀愛、乃至、その結婚には、眼の輝きや、生き／＼とした顔貌や、活潑な步調や、快活な笑ひや、積極的な思考や反省が、次から次へと現はれて來て、その幸福を物語る。これは、兩者の身體的精神的交換及補足作用がこの際高調に達することを示すのであらう。男女の兩者の握手や、キッスや、抱擁によりての感電は、兩者の補足と交換とを示し、なほ、その更新をあらはす。その活き／＼とした様子や音色

は、凡て之れ生の更新を示すものとして宜い。兩者の接觸と接合とは、各細胞各纖維に及び、その間に震動傳はり、靈氣發し、目に見へないが、微妙なる要素や、精神の交換と補足とが兩者の間に行はれてゐることを示す。この時には、男女二人の身體と精神とは詩的な感覺や心靈的な妙趣を交換して小躍し戰慄してゐるのである。

次に、男女が差異 (disparity) によつて牽引せらるゝとするシヨウベンハウエルや、マクナス、ヒルシフェルド氏の説を述べよう。その後でエリス氏の雌雄淘汰に關する批判的斷定を述べる。エリス氏の雌雄淘汰に關する斷案は *It would appear on the whole that in choosing a mate we tend to seek parity of racial and individual characters together with disparity of secondary sexual characters* (概して、配偶の選擇は種族及個人的品質に關しては類似を基準とし第二雌雄品質に關しては差異を基準とするものである) これまで、類似及差異

による男女の牽引に就ては、多く常識判斷によるもので、その爲め、恰もお伽話に類するやうなものが多かつた。そこで、一度ひ批判的に検討し、更らに、科學的基礎の上に、それを改修する必要がある。まづ、これまでの男女の差異による諸説を述べる。

差異及類似の基準 シヨベンハウエル氏は男女牽力の原因を差異に求めてゐる。氏は事實上情熱や愛好の生ずるのは、これを化學的に言表すれば、酸とアルカリとが中和して鹽類を生ずるが如く、男女と云ふ二人の人間が中和して、平均を求めようとするのであると云つてゐる。これに必要な條件は兩性が各偏してゐること、この偏性を補ふために戀愛が生ずる。この偏性は各人にその現はれの度合は異つてゐるが、何れの人でも、自分の偏した點を補ひ、中和するため、異性のうちで自分に最も都合のよい相手を選択する。男性と女性との間には無數の度合ひがあつて、男の中にも宦官のやうな女らしい嫌な男があ

り、女の中にも活潑で御轉婆な男みたやうなのがある。これは孰れも異性の注目の對象となるものではない。中和するには、男の方の男性が女の方の女性に互に相應することゝが必要で、それによつて、互に偏したのを矯めてゆく。そこで、最も男らしい男は最も女らしい女を愛し、最も女らしい女は最も男らしい男を愛することゝなる。何づれの人も、自分の缺點や弱點や型から離れた變態を滅するため、異性のそれに對する特質で補ふようにしてゐる。たとへば、筋肉の弱い男は、その強い女を求め、女は常則としては、筋肉が弱いから、通常、力の強い男を愛する。身長で言へば、小さい男は大きな女を、また、小さい女は大きな男を愛する。大きな女が大きな男を好まないのは、二人の間に大きな人種ができ、長命をさせる障りになるから、これを避けようとする天然の法則にすぎない。鼻の低い人間は、鷹鼻や鸚鵡顔の人に對し、得も言はれぬ戀情を催し、非常に細長く長すぎる身體や四肢の人は、はづれた縮むだ短い人を美

とする。氣質に於てもさうで、完全なものは、その點で不完全なものを求むると云ふことはないとしても、それを大目に見る傾がある。美男子が非常に醜婦に戀愛を催すことがあるが、これは兩性間の度合がよく調和して、女の戀態が恰も自分の反對で自分を補充し矯正するやうに見えるからである。

男女の差異による戀愛の起原觀はシヨペンハウエルより一轉してワイニングルにいつてゐる。ワイニングル氏は一九〇四年に二版を重ねた *Geschlecht und Charakter* (兩性と品性) といふ本で、男女の差異による戀愛觀を主張し、『性的牽引の法則』といふものを立てゝゐる。氏は言ふ『一切の性的分化をした生物は兩性間に性交を目的とする牽引がある。併し、男女と云ふやうな、通常の意味での男と女とはあるとしても、完全な男、完全な女と云ふやうな各性の類型を完了したものは少ない。男と女とは有らゆる比較に於て、分たるゝものとしなければならぬが、こゝに、私はシヨペンハウエルが曾て豫想したに過ぎない

男女に關する未知の自然法則としての性的牽引の法則を發見した。ワイニンゲル氏は一切の男女は必ずしも差別なく一切の異性を好愛すると云ふことをしないで、各人特定の異性を選択して、好愛すると云うてゐる。ある異性に對しては冷淡で、或は嫌氣がさし、相手が寄れば寄る程反撥すると云ふやうなものもあるが、また、全世界もその價値を失ふと云ふ程熱愛の程度に達するやうなものもある。ワイニンゲルの法則と云ふのは、『性的結合は男M女Wといふ要素が二個の異つた個體に異つた度合ひで配分せられてゐるが、兩個體はその有つてゐる男女の全部を擧げて牽引に従ふ』といふのである。今、Mに於ける男性的要素を M_u 、男女性的要素を W_w とし、また、Wに於ける男性的要素を M_u 、女性的要素を W_u とすれば最も強烈な戀愛は左の法式の場合に成立するものである。

$$(La) \quad M_u + M_w = C_1 \text{ (不變數)} = M \text{ 理想的男性}$$

$$(Lb) \quad W_u + W_w = C_2 \text{ (不變數)} = W \text{ 理想的女性}$$

そこで、個人が全く男性的なれば、全く女性的配偶を要求し、全く女性的なれば全く男性的配偶を要求することとなる。それ故に、男女兩要素の配分の上から、左の如き法式のものは、その次ぎの如き法式の補充を求めることとなる。

$$I \quad \left. \begin{array}{l} M \\ W \end{array} \right\} \begin{array}{l} M \\ W \end{array}$$

$$II \quad \left. \begin{array}{l} M \\ W \end{array} \right\} \begin{array}{l} M \\ W \end{array}$$

ウアイニンゲルの法則をなほ發展せしめて、性的特徴や類型を説明してゐるのがマグヌス・ヒルシフェルドである。ヒルシフェルド氏は性的特徴を四つに分類してゐる。その二つは生理的なものであるが、残りの二つは心理的なものである。生理的なものは、生殖器やその附屬物に關するものと、毛、音聲、胸の如き二次的特徴に關するものを含む。心理的のものは、戀愛の感情だの、性癖だの、衣服だのと云ふやうなものである。これ等四つの特徴は更らに四つの異つた要素をもつてゐる。それ故に、都合十六の場合が數へられるわけである。

この十六の要素に又三つの形式、即ち、男性的なもの、女性的なもの、及び、中性的なものがある。かくて、變化は次から次へと進み、全體に於て、四三、〇四六、七二一の變化があるとしてゐる。ヒルシフェルド氏はワイニンゲル氏の男女の結合を四千三百萬に計算したわけであるが、勿論、これが、人爲的な想像的産物であるのは云ふまでもない。こゝに至り、男女の差異に關する見解は一と先づ頂點に達したものと見てよいと思ふ。

併し、四千三百萬の差異にまで發展した雌雄淘汰を批判的に再び回顧しなければならぬが、これは性的研究の世界的權威であるエリス氏の仕事である、氏は一九〇五年に公にした『性的心理研究』の第四卷たる *Sexual Selection in Man* に於て人間の雌雄淘汰を批判的に考察し、精細なる研究を施してゐる。

ベルンハルディン・ド・サン・ピエールは戀愛は對比に基くものだとしてゐるが、これに對し、レオルナルド・ダ・ヴィンチは類似を戀愛の基準となし、繪師

は自分と同型な縊を描く傾きのあるものを愛する。かやうな事實から出發して、氏は人は自分と同じやうなものを愛するものだと言うた。この二つの對立した説は批判闡明せられなければならぬ。

身長に關しての戀愛としては、差異の魅力 *Charm of disparity* は著明でない。それは、男女牽引の原因としての理想型を形ちづくつて居るとは考へられない。類似の方では、高い女が高い男を好いたのが八件、低い女が低い男を好いたのが一つもなく、中位の女が中位の男を好いたものもない。そこで、女の場合は、類似による戀愛は都合八件となる。男の方では、高い男が高い女を好いたのが六件、低い男が低い女を好いたのがなく、中位の男が中位の男を好いたのが三件で、都合九件である。それで、類似による性的牽引は總て十七件となる。次に差異によるものは、女の方では、高い女が低い男を好いたのが四件、中位の女が、中位の男を好いたのが一件で計五件である。男の方では、高い男

が低い女を好いたのがなしで、低い男が高い女を好いたのもなく、中位の女を好いたのが八件で、計八件である。これで、類似による戀愛が總計十七件、差異によるものが計十三件である。これ位のところでは、身長に因る雌雄淘汰は確定せられぬ。

次に色による戀愛であるが、色の白いものは黒いものを好み、黒いものは白いものを好むと云ふ法則は又確定せられぬ。類似の方では、色白の女が白い男を好いたのが二件、黒い女が黒い男を好いたのが一件で、計三件。男の方では、白い男が白い女を好いたのが二件、黒い男が黒い女を好いたのが七件で、計九件である。これに對し、差異による牽引を調べると、女の方では、白い女が黒い男を好いたのが四件、黒い女が白い男を好いたが一件で、計五件。男の方では、白い男が黒い女を好いたのが三件、黒い男が白い女を好いたのが四件、中位の男が黒い女を好いたのが一件、中位の色の男が白い女を好いたのが一件で、

計九件である。そこで、總計算になると、類似による戀愛が十二件で、差異によるものが十四件である。よつて、色による雌雄淘汰は分明したこととなる。

類似と差異とによつて、戀愛を説明する場合には、いつでも、兩方に各味方がある。アルフォンゾ・ヅ・カンドルは瑞西、北獨逸、白耳義の材料によつて研究し、通常、眼の色の異つたものが夫婦になるのだとして、差異を以て戀愛の基準と見た。これに對し、ヘルマン・フォールは類似するものが愛し合ふとして、二百五十一人の男女に就て調査し若い男女百三十二人即ち六六・六プロセントは類似により、六十六人即ち三三・三プロセントは差異によりて結び、老いたる男女中三十八人即ち七一・七〇プロセントは類似により、十五人即二八・三〇プロセントは差異によりて結むだとしてゐる。そして、類似により結合する率が高いから、男女は類似の基準を以て結合するものと断定した。ゴルトンや、ピヤソンや、ウエスタアマルクや、メーンなども、男女結合の基準に就て

夫々研究した。その結果は必ずしも一致しない。斯様な成果によつて、類似と差異との基準を決定することは困難であると云はなければならぬ。

エリス氏は近親結婚に對する嫌忌の情を以て、男女の關係を決定する一つの契機であるとしてゐる。いつたい近親間に結婚することを嫌忌する特別の理由としてはなく、たゞそれは感情的消極的のものである外何ものでもない。求婚と云ふことは、一方には、性的エネルギーを蓄積することによつて成就するものである。舞踊を少年少女や青年がなせ好むかと云へば、舞踊をしたり、これを見たりすると、性的エネルギーが高まつて來るからである。つまり勢力の蓄積が起るのである。さうすると、舞踊と云ふものが性に關係のあることが分る。この性的エネルギーの蓄積が結合の前提だとすると、近親は互に日常接觸の機會が多すぎて、感覺の鈍麻を來し、相見相觸れて性的エネルギーを發し、これを蓄積することが出來ない。それがため、肝心のチューメツセンツが生じない。視

聽覺及接觸から發する性的な刺戟は、近親にあつては恰もないに等しいのだ。これが近親をして冷淡ならしむる原因である。それで、偶然相別れてゐた兄弟、例へば、兄が洋行してゐて歸つて來たと云ふやうな場合には、突然性的エネルギーが起つて不倫な關係が生ずるやうなことがある。即ち、*Brothers and sisters in relation to each other have at puberty already reached that state to which old married couples by the exhaustion of the youthful passion and the slow usage of daily life gradually approximate* (兄弟姉妹の關係は老夫婦が若い感情を喪失して毎日の常務に慣らされていつたと同様の状態にまで、思春期に於て既に到達したものである)。近親關係を分析して見ると、面白いことには、類似の基準が絶對的のものでないと云ふことである。すなはち、絶對的に男女が類似した場合には戀愛は起らぬのである。これは、勿論、種族的品質の場合に就て云ふことだが、種族的品質に於ては大體類似を以て戀愛の基準とする。併し、

種族的品質の場合に於ても、近親の關係による場合の如く、絶對類似によつては、男女の牽引は起らぬものと見るべきである。高い男は高い女を好くとしても、寸分異はぬやうなものを好くのではあるまい。また、色の場合でも同様なことが言へる。

これに反し、種族的品質以外のものは差異を基準として戀愛を行ふものだとすべきである。こゝでは、好新と云ふことが戀愛の基準になる。種族的品質から性的品質に行くとき、明かに差異を基準とし、好新を以て戀愛を進めて行く、第二雌雄形質に關するものは明かに差異により男女の結合を齎らす。男女は各異性に對して要求するところが異ふ。男は丈夫で、勇氣があつて、粗剛で荒くれてゐなければならぬし、女は、柔軟で、丸つこく、温順でなければならぬ。身體のこなし方、容姿、習慣、殊に衣服は性愛に對し大なる影響を與へる。これは、習慣や職業の相異より來るものでもあらうが、主として、兩性の性的傾

向から來るものである。例へば、ある所で、同一なことを兩性がしてゐるとしても、そのやり方が異ふと云ふことは容易に發見しうることである。男は女のやうにすることを嫌ひ、女は男のやうにすることを忌む。然るに、男女は各その嫌ふところのことを相手に見出すを喜ぶのである。衣服の場合に於て、これが高調に達する。もし、男女が各同じやうな着物をきたら、着物の使命としての異性の魅惑と云ふことは消失して了ふであらう。

要之、種族的個人的品質に對しては、大體、類似を基準として戀愛するが、それも絶對的のものでなく、多少の差異によりて初めて性的牽引の使命を果たし、第二雌雄形質に至つては、全然、差異を基準として戀愛を行ふものである。エリス氏の論述に従つて結論すると、如上のやうな斷定に達する。これが最後のものである。

差異の結合と戀愛　もし、男女に選擇の自由が許されるならば、兩者は互に

自身の性質を肉體的にも精神的にも最も完全に補足してくれる異性を選び、これに連れ添ふであらう。これが、差異を統合することを目的として發動する戀愛の意義である。戀愛の本質は差異の結合にある。兩性の有つてゐる差異を統合し、一層高き人生に達しようとするのが、戀愛の本質であり、また、その目的である。自由戀愛は個性と人格を基準にして行はれるもので、野合戀愛と異つたものだ云ふことは既に繰り返へし述べておいた。自由戀愛に於ける對象は戀愛であり、野合戀愛に於ける對象は性慾である。自由戀愛にも性慾の基礎は無論あるが、その性慾は精神化されたものである。そこで、自由戀愛は精神化された性慾を通じて、一つの個性と他の個性とが相結び相補ひ、かくして一層完全なる人生に到達せむとするものであると云へる。そこに、戀愛の意義があり、差異統合の極致がある。

リツケルト氏は男女差異の總合を以て戀愛の終局となし、深奥なる戀愛哲學

を立てゝゐるが、これは、米田博士が既に紹介されたし、また、同博士が、更らに、それに加へて、卓越せる自説をも述べて居られるので、私はリツケルトの戀愛論は博士の著書にゆづり、凡て之れを省略に付し、私は自分の途を進むこととする。既に觸れておいたやうに、キッド氏の『力の科學』により、私の男女差異の思想は成長してゐたので、私は主としてキッド氏の男女の差異による戀愛觀と文明論とに沿うて進まうと思ふ。

キッド氏は最初の個人的統合 individual integration は個人の肯定として出發したとする。個人的統合は個人中心のもので、それは現在によつてゐるものである。社會的統合 social integration に於ては、個人の生命と幸福とは現存の個人以上の社會的統合に向つて犠牲にせられるもので、其重力の中心は個人以上のものであり、また、將來にある。知識は利己的感情の總和に對する最高形式である。これに對し、理想的感情 The emotion of the ideal は利他的感情の

總和に對する最高形式である。それは、個人をして社會に移動せしむる原理である。キツド氏の論議の背後をなしてゐる原理は斯様なもので、知識よりも感情を重しとし、それに高等なる位置を與へ、婦人を以て感情の代表と見、更らに、それを *The emotion of the ideal* の權化とする。これによつて、現在は將來に轉じ、利己は利他となり、個人的統合は社會的統合となると考へるのである。これ等の高等なる統合や進化は婦人を通じて、また、婦人によつて行はれるものである。婦人と、その精神なくしては、現代の文化は一層高き文化に進化することはできない。現代の文化は婦人の力によりてのみ一層高等なる理想感情による文化に達するのである。併し、私はこの婦人によりて代表せられる感情と、男子によりて代表せられる知識との融合によりて、高等なる統合的文化が産出せられると考へるのである。私の見解は、この意味で、キツドより發して、キツドと別なるものとなる。併し、キツド氏の考へるやうに、今日の爭

鬭を基調する現代文明は、種族と將來とに基く女性的意義を容れなければ、全體的な文化に到達し得ないのは明かである。少くも、今日の男性文明を以て、完全なる文明と考へてゐるのは大なる謬想でなければならぬ。

これまで、爭鬭好きの男子の造つた文明は個人的統合を基準とするものであつた。そして、それは知識に偏重するものであつた。今後の社會は、知識に對して感情を主張するところのものでなければならぬ。が、それは所謂理想の感情にまで高まらなければならぬ。これが、自から個人的基準をもつ知識より社會的基準をもつ感情による社會的統合に轉せしむる。これまで感情は極度に蔑視され、若くは、無視されてゐた。それが爲め、感情を代表する女が無視され、従つて、女の貢献が文化に加へられなかつた。マンメイドの世界に女がゐた爲めに、極度の壓制をうけ、文化は一切我儘な男子の造るところのものとなつた。單に、男子が腕力に優れてゐたと云ふだけで、女は奴隸として、壓伏されて了

ひ、その文化に對し、當然主張しなければならなかつた感情をも一擲して、今日に至つた。併し、感情により、初めて、社會的基準の思想が生ずるので、社會的統合は女により産聲をあげる約束をもつ。感情は利他的のもので、將來に關するから、感情の現代文明への導入により、初めて、利他心及將來の觀念が旺盛になる。ところが、この感情は女によりて代表せられるので、將來の社會が果して、社會的統合と、社會的基準思想と、將來とによつて、改造せられるなれば、文明改鑄の役割は又女だとしなければならぬ。今日の文明諸國は孰れも争鬭すきな男の占領してゐるもので、利他献身若くは犠牲と云ふ觀念の甚だ稀薄なるものである。それがために、現今の世界は今日の問題につきて了い、明日の問題を取り上ぐる餘裕がないのである。偶々、女が、文明の舞臺に出場しても、如何にも空氣が稀薄で、窒息の運命にあふので、女の意義が文明に加へらるゝ機會とてはなかつた。それ故、明日の觀念も、社會的基準思想も、利

他心も、犠牲の精神も開發しなかつた。現代の世界が野蠻みて居て、喧嘩ばかりして居るのも、斯様な事情から來る。これに反し、感情によつて改造せられた將來の社會では、個人の意識は後退し、利己は死し、自分よりも他人だ、個人よりも社會だと云ふことになるから、明日の考へも、他人の存在も、社會も、社會に献身することも、自から生れ來るであらう。それ等の社會的統合に關係するものは、期せずして、現はれなければならぬ。知識の世界はそれ自からうちに、次の時代に轉入する契機を包藏してゐない。知識ばかりに任せてをくと、喧嘩や、口論や、自分よがりや、その日かぎりや、個人中心やが、次から次へと現はれて來る。それが繰り返へさるゝことによりて、今日までのやうな類型の社會ができ文明が造られたのである。

女がどんなものを有つてゐるか、世界はそれを知らうともしないで、今日まで經過して來た。單に、男子にかゝり合つて、女の本質が時々現はれたに過ぎ

ない。併し、男の造つた土壤であるから、その土に蒔いて生へて来るのは男まがいの種子ばかりである。女自身の種子は土地に適さないもので、すなほに萌え出すことはできない。それが爲め、世界は男子の蒔いた種子で、無茶苦茶に繁茂してしまつた。土地一杯に蔓つてゐる雑草の中に他の種子を下しても、徒らに枯死するやうに、男の造つた土地へ、しかも、繁茂して他の宿る餘地もないかのやうに横暴を振つてゐる中へ、たとへ、一つ二つ女の種子が飛び込むでも、それが根を下し、幹を出し、葉を着け、花を咲かす道理はない。かういふ有様では、女の本質がどんなものか分らう筈はない。そこで、世界は未だ女を知らぬのだと云うても差間はないのだ。女の本質がどんなものであるかと云ふことは、女の世界ともなし、女子に自由活動の権利を與へ、多年實驗さして見なければ分らないのだ。單に、郵便や電話に従事して見たとて、ハッキリ分らう筈がない。これまで、文明諸國が郵便電信に女子を使用して來た經驗によ

ると、最初、豫想したものは違ふやうである。こんな些細なことがよく分らぬのだから、女一般がどんなものであるか分らう筈がない。これは、男に分らぬと同じく、女にも分らぬのである。自分の才能と雖も、十分に活動の自由を與へられ、やつて見て、初めて分るので、初めから自分はこんなものと豫想することができるものではない。それと同じく、女も自分自身自由に活動して見てその才能をのこらず開發さして見なければ、自分がどんなものか洞見することの能きる筈のものではない。それ故、今日では、男が女を知らぬと共に、女も亦自分を知らぬものと云へよう。現に開發してゐるやうな男女の本質が永久的なものだとは何人も云ひえぬであらう。實は、男の本質はそれ自からの範圍に於て、自由なる活動により、一と先づ、明白になつたとも云へやうが、女と共に男自身建設するものゝ何であるかは未だ分明しないであらう。女の男子に對する心理的差異と云つたやうなものは、果して、本質としての女の心理であ

るか、但しは、歴史的に存在し社會的に發現したものに過ぎないか、一切不明である。今後、女子をして男子同様、自由なる活動をなさしめ、その本質をのこらず開發させることによつてのみ、初めて、女子の永久的本質と云ふものが露出せられるであらう。

この永久的本質は、こゝでは、婦人を特徴づけるところの、キッド氏の所謂感情若くは *The emotion of the ideal* であるかも知れない。私は婦人が自由に活動して、その永久的本質を露出した曙に於ても、婦人の本質は男子と同様なるものとして現はれぬと信ずる。男と女とは同一なものではなく、また、同一なものでありえない。こゝに、男と女との特色があり、また、銘々文化に對する特別なる使命がある。その特別なる使命をつくすために、女は將來と、感情と、犠牲的精神とを以て、地平線上に現はれ、その割り當てられた役割を演じようとする。婦人は今正に徐々に或は急速に活動の舞臺たる地平線上に現はれ

てゐる。十年前に、シユライネル女史は、女子の職業は男子の厭制と横暴とにより、賣色の一事のみとなつたと浩嘆してゐたが、ミーキンス女史は、今や殆むど男子の従事してゐる職業の中で、婦人の従事してゐないものはないと云つてゐる。ギルマン夫人は婦人の獨立の手段として經濟的解放を主張してゐたが、それは、既に、現實化してゐると云つてよい。併し、なほ、男子の厭制と横暴とは到るところに繁昌してゐる。今日では、婦人の全般的解放の序幕が切つて落されたと云ふだけである。この現状より、婦人は遙かに、その軍を進めなければならぬ。かくて、初めて、婦人の文化建設の壯舉が始るであらう。

女の建設する文化がどんなものだと云ふことは分らない。女が解放されて、その潜在する能力を發達させてからでなければ、そもく、女とはどんなものであるかと云ふ初手のことが分らないのである。従つて、その建設する文化なるものがどんなものであるかと云ふことの分らう筈がない。併し、それは、男

の建設した文明と異ふたものだと言ふ一事に至つては、既に、明白となつてゐる。そして、それが、社會的統合として、道徳に、法律に、宗教にまで、結晶するもので、知識よりも感情であり、現在よりも將來であると云ふことは略明かであらうと思ふ。婦人の解放が婦人の解放のみを意味せず、婦人と共に、男子をも解放するところの人類解放であることを意味するのはこれがためである。社會や人類から見れば、男だとか女だとかと云ふことは重要でない。寧ろ、社會や人類それ自からが重要である。そこで、女の解放といふことが、全體として、人類解放の意義と使命とを有つてゐると云ふ事が重要なのである。男のやうに争闘好きで、争ひを以てその職分とし、闘士といふことを以て無上の資格であるやうに思つてゐるのは、男の造つた野蠻なる時代相社會相によるからである。個人的で、かつ、偏知的であり、争闘のみに没頭してゐるやうな社會は決して愉快なものではなく、また、理想的なものでもない。そこで、婦人の社會

精神や、犠牲の觀念や、將來の考慮といふものが加はり來り、一度び、偏知的な文明を感情により色ざり柔げ純化しなければならぬ。かくて、初めて、眞の文明、人間的な文明と云ふものが、現はれるであらう。ギッド氏は餘りに女性文明に偏傾してゐるため、男性文明の次へ女性文明が來るやうに思つてゐるが、それは、矢張り、一つの誤解であり謬想でなくてはならぬ。それでも、ギッド氏も、*The central problem is the relation of woman, not to man, but to the need of society* (中心問題としては、女子が男子に對する關係でなく、社會に對する關係である) と言つてはゐるが、氏の論調から判斷すると、氏は男女統合の文明を目標としてゐるのではなく、男性文明につゞく女性文明を目標としてゐるのである。併し、氏にあつても、矢張り、男と女との關係ではなく、それが社會に對する關係であるとし、兩性によつての共同文明と云ふものが、終局の目標であるとする考へに暗に到達しかけて居るのではなからうかと思ふ。キッ

ド氏の目標が恰も女性文明であるがために、氏は未だ統合的文明の思想には明かに到達し得なかつたのであらう。

男子の婦人觀と云ふものは多く我儘勝手なものだが、それは多く純真なる婦人觀ではなく、男子の主觀を通した婦人觀であつた。男子が自分の解釋によつて造り上げた婦人觀である。すなはち、男子的な婦人と云ふものが婦人そのものであるとしてゐたのである。この男子の解釋は、男子が自分の概念としてゐるだけでなく、また、婦人にもそれを強いた。かくて婦人もそれを眞實自分のものであると信するに至つた。これが、男子統治の一つの成功とでも言ふべきものであらう。男子は自分勝手に婦人を願使したばかりでなく、婦人を全く奴隸として従屬せしめた。かくて、婦人は男子よりも劣つたもので、男の附屬物であると思ふに至つた。これは、重に、男子の標準を以て、女子を品等づけられた爲めであらう。男子の標準から云へば、利己的個人的で、争闘を事とし、勇氣

や、腕力や、意志力や、知識に優れてゐることである。かういふ男子の標準に比ぶれば、女子は男子よりも劣等のものとなるのは當然で、かくて、自然、女子の劣等觀と云ふものが生れ、そのため、女子蔑視の風が生じたのである。併し、女子の特徴が、勇氣や、腕力や、意志や、知識ではなく、感情であり、個人よりも種族であり、現在よりも將來であるとするれば、男の標準によつて、標準することは無意義となるであらう。かくて、女子劣等觀は忽ち敗走すべき運命である。婦人の本質に關する男子の觀念が改修せられるば、婦人の社會建設に對する意義も自から明かにせられよう。かくて、キッド氏にあつては、男性文明に次いで來るべき女性文明であるが、私にあつては、男女の協同して築造する統合文明である。

男女の統合文明を造る第一條件は婦人の解放である。今日でも、未だ婦人の世界に文化が普及してゐるとは考へられない。文化の機會均等と云ふものが男

女の中に樹立されて居ないのである。多少の機會均等はあつても、文明獲得及所有の權利は婦人に對し未だ甚だ不満足なる程度のものたるに過ぎない。私は大學教育をうけようとする少數の婦人から、屢々女子の有難からざる特別待遇と云ふものを聞かされるが、これは婦人の僻と考へることはできないであらう。それがため、婦人精神と云ふものが秘藏されて居り、婦人は未だ不思議そのものと云ふ有様である。男女の統合文明をつくり、男も女と同時に二倍になつたと感じうるためには、その前提として、婦人の完全なる解放を實現しなければならぬ。婦人の解放と云ふことは、二つの意味を含むものとしなくてはならぬ。婦人の經濟上政治上文化上の解放といふのと、その外、女性の解放といふものが、それである。通常、婦人の解放は人間として市民としての解放を意味するけれども、これでは無論足りない。また、そのやうな男女を同等のものとしておいての解放では、却つて、婦人の解放とはならない。オーウエンは平等狂

になつて、女工にも男工と同じ衣服を著せたが、女工はこの男工と同等な無上の權利を有難いものと思はないで、中性的衣服を脱ぎ捨て、自分達ちの着物に歸つていつた。もし、婦人の解放を以て、男と同じものとなるとする普通の意味での解放であつたなら、それは世界に存在しない中性的人間の解放を目標とするものであつて、婦人の解放そのものではない。しかし、それが、眞實婦人の解放になるやうに思つてゐるのは困つたことだ。今日の婦人運動者の不眞面目な解放といふものは、かう云つたやうなものである。これでは、解放にならないばかりか、却つて、婦人を他の鐵鎖につなぐことゝならざるをえない。こゝが、大切な點だ。個人としての男女の結合に於ても、社會や文明としての男女の統合に於ても、この點を中樞的なものとして、男女關係の解釋を進めなければならぬ。男女の平等と云ふことが、男性及び女性を減衰せしめ、抽象的な人性といふやうなものに、熔し込むのであつたなら、それは男性としての

男、及び、女性としての女を等しく殺すことになるだけだ。男性及女性が各十分に完全に各自の特質を保守し、且つ發達することが、畢竟、男女各自の究極の目的であらねばならぬ。して見れば、抽象的人格と云ふやうなものを目標として解放運動をやるわけには行かぬ。それで、世の婦人運動者達は、自づから婦人を衰弱せしめることに骨折つてゐるものだと云はなくてはならぬ。であるから、婦人の解放と云ふことは、人間として市民としての解放の外に、女人としての解放でなければならぬ。女性を完全に開發し、その特有の性格を遺憾なく發達せしめることが婦人の眞の解放である。かくて、發達開展したものは即ち眞に女性と云はれ女人と云はるべきものである。これは、婦人に對しても價値のあるものであり、等しく男子に對しても價値のあるものである。それは、得も言はれぬ魅力のあるものであり、雌雄淘汰の基準となるべきものであり、最後に、社會や文明の原動力となるべきものである。實に、これのみが、完全

なセックスの色ざりや光りを帶むたものである。そして、そこに、眞の個人が生れ、性の妙趣をあらはす統合が現はれる。

かくの如き本質と使命とをもつ女性がどんなものであるかと云ふことは屢々述べたやうに未だ分らぬのである。解放されたる永久的な女性といふものは將來の問題である。たゞ、今日では、リツケルト氏のやうに、男子は將來財の創造及び將來價値にむかひ、女子は現在財の創造及び現在財の實現に向ふと云ふやうなことを言つて見るだけのことである。キツド氏の *indivial integration* としての男性、*social integration* としての女性といふものも、同一の性質に屬する併し、孰れにしても、男女の究極的意義はその差異にあるのであつて、兩者の差異により、單に男子のものとしても亦婦人のものとしても現はれないところの藝術や道德や宗教や科學や哲學や政治が編み出されるのである。男は女によつて完了し、女は男によつて完了する。その如く、社會や文明は男と女によ

つて初めて完了する。この至境に達することが、男女の性としての究極でなければならぬ。

戀愛至上の本質　すでに、戀愛の本質は闡明された。そして、男女の性としての究極的意義も明かになった。かくて、戀愛至上の本質と概念とを闡明することに究まらなければならぬ。

戀愛や男女關係は人生の玄妙なる生命の全的燃焼である。戀愛によつて、生命は完全燃焼に達する。されば、戀愛や男女の關係は蕩兒の肉慾や淫賣婦の放埒沙汰とは全然別もので、決して、賤いものでも、穢れたものでもない。賤いものも、穢れたものも、それに觸れると、忽ち焼きつくされてしまふ。

卑賤な劣情は動物的な性慾であつて、それは精神化した戀愛ではない。性慾は單なる肉感であるが、戀愛は精神化された肉感でなければならぬ。戀愛を以て、賤しむべきもの耻づべきこととするのは、根本的な謬想で、それは、孰

れにしても、蕩兒の亂行より派生せられたるものに外ならぬ。戀愛は現實なる人生の事實であつて、人間の發達のため、文化の完成のために、缺くべからざる人生の本質的一要素である。男となるにも戀愛を通らなければならぬし、女となるにも戀愛の門を潜らなければならぬ。その上、文化と云ふものが、男女の結合協力を要するものとするれば、それは、人生に對し、確かに善きものだと云はねばならぬ。併し、それは最も善きものと言はれるであらう乎。こゝに、戀愛至上の觀念の詮議立てがある。人生に對し、戀愛が善きものだと云ふことは先刻解つたとして、それは、他の一切を手段化する程、善きものであらうか。乃至、それは至上であるか、こゝに問題が生ずる。

戀愛といふものは、個人と個人との生活を完了するもので、重大なる意義のあるものではあるが、これは當事者たる男女かぎりのもので、大社會や世界から見れば、餘り價值あるものでないかも知れない。それを至上と稱するは穩當

であらうか。キツドの所論より導かれた私の所謂男女によつての統合的文明といふものは人生の-high 目的であらう。併し、男女が合して二倍になつたと感ずることは、それ自身目的として考へられるであらうか。戀愛なければ個性はない。男女の結合は先づ精神化した戀愛のプロセスを通らなければならぬ。この故に、戀愛なくしては個性なしと言へるだらう。併し、その場合でも、個人は戀愛より面積も廣く奥行も深いものである。米田博士は、『個人生活は戀愛によりて高められ完成されるが、併し、高められ、完成された個人生活は戀愛以上のものである』と云うてゐられる。個人が更らに社會に交渉し、關係をもつことゝなると、個人の場合に於て、總ていも、至上でもなかつた戀愛は益々その範圍を狭められる。社會に對する意味に於て、益々戀愛は至上ではなくなる。社會に對しては、愛の及ぶ範圍はたかく二人かぎりのものであるから、これを押し廣めて、人類全體を含むものとするのでなければ、至上のものといふこ

とは能きぬであらう。要するに、戀愛は、縦へ、個人完成に對し、なくてならぬ要件であるとしても、それは人生の究極的目的であり、また至上のものとすることはできぬ。

米田博士は戀愛至上の意義を最も明快に論述してゐられるが、人生を個人生活と社會生活とに別ち、なほ、人生の意義を超經驗的絶對的意義と經驗的相對的意義とに二分し、戀愛至上の本質を検討して、戀愛は至上のものではないと結論してゐられる。今、私は博士の所論と大體同一なる結論に達してゐるのであるが、超經驗的意義に對する戀愛至上の意義に就ては凡て米田博士の詳細なる論述に譲り、私は既に自分の論路を通じて精細なる論議を試みたので、ここでは、單に、自分の結論を付け加へることにする。

絶對價值としての戀愛の哲學的概念を樹立することになると、この意味での戀愛は他の如何なる絶對的價值よりも優れりとしなければならぬ。これが、戀

愛の至上觀である。すなはち、戀愛價值を以て永久的絶對價值としての眞、善、美、聖の孰れの絶對價值よりも優れりとしなければ、戀愛の至上主義は成立せぬ。戀愛の絶對價值は眞價值よりも、善價值よりも、美價值よりも、聖價值よりも、高等なるものとしなければ、戀愛の至上絶對價值は樹立せぬと見なければならぬ。戀愛を至上價值として讚美するものと雖も、果して、戀愛を以て、眞、善、美、聖の四價值を超越するものと考ふるであらうか。青春の熱情が迸つて居る時期に於ては、戀愛に對しては、眞理も、美も、善も、宗敎もあつたものではなからうか、かくの如き妄想を超越して、彼岸遙かに、戀愛の絶對を主張するものがあらうか。通常、戀愛を以て至上なりとなし、他の價值をそれに從屬せしむるのは、青春時代の妄想であつて、永久的に戀愛を以て、至上價值なりとするのは甚だ困難であるとしなければならぬ。戀愛を絶對とすると云ふことは又それ自身が目的であつて、その他のものは一切それの手段と見る

のであるから、戀愛至上主義は眞、善、美、聖の絶對價值をその手段と見なければならぬ。すなはち眞價值や美價值や善價值や聖價值は戀愛の至上絶對價值に從屬し、それ等は孰れも戀愛價值發展の手段となると見る場合に於てのみ、戀愛は至上絶對價值たりうるのである。併し、何人と雖も一切他の價值を超越し、それ等の價值を從屬せしめ、それによつて、戀愛を完成させなければならぬと考へるものはなからう。然らば、戀愛を以て、至上絶對であると見るのは、青春の妄想であるとしなければならぬ。青年期に於ては、戀愛は恰も至上絶對たるが如く考へられる。これが、青春時代の妄想を形ちづくる。青春時代の男女は性慾の高まり、戀愛の高調に達した刹那に於ては、戀愛を以て、無上絶對であるが如く考へるのである。これが、戀愛至上の心理へと進む。この時期に於ては、眞理も善も美も宗敎も一切が戀愛のうちへ溶し込まれて、融解し解體する。で、さながら、獨り、戀愛のみが存するが如きイリュウジョンを起すの

である。この妄想が戀愛至上の觀念である。いくら、青春時期の男女と雖も、戀に促されて羽化登仙するにあらざれば、一切他の價値を以て戀愛に従屬すると考へ、また、他の價値は戀愛に比すれば存するも存せざるも同じものであるやうな卑賤なものと考へないであらう。唯、戀に捉へられ、漸次、高調に達するに連れて、幻想が起り、錯覺が生じ、戀の外又よいものがないと云ふことになり、プロウニングの *Love is Best* であり、『永遠の女性われらを導く』であるやうな心境が生ずる。男と女との戀には久遠性が輝く、女には久遠の女性が光る、そこには、今も昔も不變なる永遠性があり恒久性がある、萬のものは亡びても、戀のみは亡びるものではない。戀は實に久遠である。感激と憧憬と希望と愛着との白熱して溶解したものは、人間界の消息を語るのではなく、それは、既に天界のもので、歌や詩の世界である。かういふ久恒絶對な戀愛のみが無上である。と、かやうに思ひ耽るのが青年男女である。こゝに、幻想が生じ、錯

覺が現はれ、忽ち、戀愛を精神化し理想化し、羽化登仙のプロセスを経て、之れを無上絶對なものとして眺める。こゝに、戀愛の至上觀が来る。こゝに、戀愛を以て至上なりとする戀愛至上主義が現はれ、また従つて、戀愛至上の人生觀も生ずる。併し、幻想や錯覺は、どこまでも、幻想や錯覺である。美しい、併し、にがい戀の霧が、少しづつ消えてゆくと、幻想や錯覺は初めてそれだど氣付くやうになる。かくて忽ち、戀愛至上の觀念は消滅する。斯様ないきさつによつて生滅する戀愛を以て無上絶對なりとするのは、實は、青年の眞面目で、しかも醉狂な論理をそのまゝ振り翳すものである。こゝに至り、眞至上主義は戀愛至上主義よりも以下のものであるか、善至上主義は戀愛至上主義よりも劣れるものであるか、美至上主義は戀愛至上主義に従屬すべきものであるか、最後に聖至上主義は戀愛至上主義の従僕なりやの間を發しなければなるまい。かくて、孰れにしても、戀愛至上を以て、眞至上、善至上、美至上、聖至上、よ

り一層上のものたることを要求する権利は消滅するであらう。こゝに於て、戀愛至上の根據は破壊されるのであらう。戀愛は人生に價值のあるものであるが、それは、無上でも、絶對でも、乃至、至上でもないものであらう。

最後に、私は米田博士の結論を引用したい。

『戀愛至上主義は個人生活の一定の期間、一般に青年期に於て、大なり小なり人々の精神を支配する人生觀であるが、人々若しこの人生觀を徹底的に實行せむとすれば、その期間に於て人生を終結せねばならぬ。かくて戀愛至上主義は眞善美聖の如き永久絶對價值を實現せむとする眞至上主義、善至上主義、美至上主義、聖至上主義の如き人生全體に亘りて遵奉さるべき主義或は人生觀ではないのである。……要するに、余は戀愛至上主義は哲學的に見れば、一の人生觀として、成立しうるものと考へる。それは、個人生活の一定期間に於ては、人心の深い要求から起るものである。併し、本來期間的な戀愛價值の實現を以

て、人生の完全終結と觀するは、あまりに人生を貧弱なるものと見ることになる。而して余は眞、善、美、聖等の永久的絶對價值を生きられるまで生きて、益々深く實現し、以て豊富なる人生を發展することが人間の至上目的であるべきものと信ずる』

こゝに至り、Love is best は誤りであつたことが分つた。それと共に、また、戀愛の久遠恒久性をも樹立することができた。肉は靈であり、靈は又肉である。こゝに、現代人の美しき深い戀愛觀が生ずる。

Let us not always say

“Spite of this flesh today

I strove, mad head, gained ground upon the whole!”

As the bird wings and sings,

Let us cry “All good things

Are ours, nor soul helps flesh more, now, then flesh help soul!"

— Browning, Rabbi Ben Erza, XII.

第八章 青年と道德及宗教

第一節 我國の青年運動

今日の青年運動の持徴 今日の青年運動を見ると、我國の教育が主知的で、意志教育、乃至、宗教を輕んじてゐることが分る。青年時代の教育は主知的で、所謂もの知りになつたからとて、性格を造る上に、何の役に立つものではない。知識ばかりあつたところで、意志もなく、理想もないやうでは、知識は畢竟誘惑に對し、何の防護にもなるものではない。寧ろ、その反對に行つて了ふのが常で知識があるために却つて餘計悪いことをすると云ふことにもなる。

尤も、今日の少青年に補習教育の必要なことは言を埃たない。六年の義務教

育位では甚だ心細い。併し、知識開發の途は既に相當の注意をひいてをり、漸次完成の域に達して行くが、意志教育及宗教は凡て等閑に付せられてゐる。英國は義務補習教育が盛で、一年間に二百八十時間を補習のために費してゐる。そして、十四歳以下のものは絶対に工場商店で使用することを禁じ、十五歳乃至十八歳のものを使用してゐる所では、補習教育時間には必ず出席せしめねばならぬこゝに規定してゐる。原案は一週八時間で、一年四十週を標準とし、三百二十時間と計算されてゐたが、實業家の反對により、三百八十時間に削減されたのである。我國でも山口縣の如きは、一年三百時間の補習教育をやつてゐる。これで見ると、我國に於ける青年教育の主調といふものが分ると思ふ。知識教育素より可なりであるが、知識偏重の主知教育といふものは宜敷くない。知識教育に加へて、我國では修養といふことをよく云ふ。修養大いに可なりで、今一層、修養を盛にし、意志の鍛練を行はなければならぬ。知的及技能的

淘汰に偏重してゐては、前途有爲の青年はできるか知らぬが、有望の青年はできぬ。我國の青年團は種々の施設をなし、仕事をしてゐるが、修養に至つては恐くその青年團事業の中樞をなすものであらう。それで、私は我國の青年運動は主知的で、それに修養を附加したものだと思ふのである。

青年運動の現状 青年運動史のうちで、基督教青年會の事業は異彩を放つてゐた。我國の青年運動には、これまで基督教青年會の貢献といふものが大なるものであつた。現代の青年運動は一六九〇年にその端を發し、同年、ド・フォード氏が風俗改良會といふものを設けた。一七八九年より一七九六年の間に四つの協會がバーミンガムに設立せられた。最初のキリスト教青年會は一七六八年に瑞西のバーセルに起り、基督教の信仰を鼓吹し、かねて、愛國心の普及を圖つた。併し、純真なる青年運動が起つたのは一八四四年より一八六〇年までの間である。この期間には、所謂青年の意識なるものが生じ、青年運動は青年の

もので青年によつて運営せられなければならぬとした。我國に於ける純真なる青年意識をもつ青年運動と云ふものは、漸く昨今のことで、私は昨年五月十五日より十八日まで、京都公會堂に開催された全國青年大會に於て明かに青年意識の發生を認めた。私の傍聴してゐた時には、青年は口角泡を飛ばして全國青年團員の年齢の制限に就て討議しつゝあつた。そして、その論旨は青年團員たるものは、少年にあらず、壯年にあらず、老年にあらず、たゞ、青年たるべきもので、青年のみを以て組織しなければならぬとした。であるから、白髮頰齡の老人や、世話役然たる壯年は須らく青年會より退出してもらい、青年團は二十五歳以下の青年を以て組織すべきであるといふ主旨が繰り返へし述べられた。これは、明かに、『青年のための青年』の意識で、青年がそれ自からで一つのクラスを構成すると云ふ意識に到達したのである。それ故に、私は大正十二年を以て、青年運動について記憶すべき年であると云ひたいのである。

青年運動は英國や米國に起つたのみでなく、獨逸にも、佛蘭西にも、和蘭にも、伊太利にも、白耳義にも、丁扶にも、諾威にも、瑞典にも、西班牙にも、露西亞にも、亦我日本にも起つた。一八五五年には、巴里に萬國青年同盟ができ、瑞西のジエネバに中央委員が設置された。現今では、五十五ヶ國が萬國青年同盟に加入し、八千以上の青年團が抱擁せられてゐる。萬國青年同盟は四年毎に開催せられることになつてゐる。

我國の青年運動と宗教　我國の青年運動には毫も宗教的色彩がない。これが、我國青年運動及事業の特徴であつて、また大なる缺陷でもある。歐米の青年運動は我國の青年運動に對し著明なるコントラストをなし、宗教を以て、その特徴としてゐる。歐米の青年運動は宗教運動であると共に、又一種の社會運動である。即ち、青年運動の基調が宗教的で、並せて、それが社會生活に向つてゐると云ふことが歐米の青年運動の目立つ點である。それで、私は歐米の青年運

動を以て、宗教的社會運動だと云はうとするのである。シカゴのキリスト教々役者會議の議決した青年運動の綱領と云ふものは左の如きものである。

- 一、キリストに青年を拉し來り、如何にしてそれに奉仕しうるかを目的とすること。
 - 二、教會の組織體内に、イエス・キリストの精神を作興すること。
 - 三、宗教的發展の機會を與ふることによつて、青年の宗教的發展を促すこと。
 - 四、青年の宗教的性格をつくること。
 - 五、知識、感情、愛人の精神及び主義を養成すること。
 - 六、社會生活を通じて、心靈生活にいたること。
 - 七、青年を青年としてまち、大人として遇せざること。
 - 八、青年の身體的精神的心靈的要求を重視すること。
- これを見ると、明らかに歐米の青年運動が宗教的であると云へる。宗教的發

表の機會を與ふることによつて、青年の宗教的發達を促すことや、青年の宗教的性格をつくることを目的とすべしとの要目は明かに宗教的なものである。我國の青年會や青年團には宗教的發表の機會もなければ、また、それが、與へられやうともしてゐない。我國では、青年の宗教的性格をつくらなければならぬと考へたこともなからうから、宗教的性格とは何んなものかと云ふことも知らないでゐる。これが明かに歐米の青年運動との對比をなす。我國の青年運動は一つに主知的で、學校教育の延長たるが如き觀があり、それに、修養が附隨してゐるに過ぎぬ。

それから、シカゴ教役者會議で決議した綱領の中に、青年を青年としてまぢ、大人として遇せざることゝすると云ふことがあるが、それは、*Young men for young men* を主義としてゐるもので、我國の青年運動の如く世話役たつぷりのものや、白髮顔齡の老人や、公吏や官吏の指南役が多いのとは明かな對比をな

す。我國では、青年を基準とし、青年の身體的精神的心靈的要求を重視するやうなことなく、寧ろ、青年を或る種の道具に使つてゐるかの如き觀がある。これでは、青年を開發して國家有用の材となすことは出来なからうと思ふ。

終りに、我國の青年運動には社會生活と心靈生活との對峙がない。社會生活と心靈生活とは我國の宗教家などの考へてゐるやうに分斷さるべきものでない。社會活動は心靈化しなければ完成するものではない。また、宗教は社會化される約束のものである。さもなければ、それは、昨日の宗教ではそれも宜いとして、今日の宗教はそれであることはできない。昨日の宗教は個人的宗教であつたが、社會化時代の宗教は社會的なものでなければならぬ。すなはち、それは、社會的宗教でなければならぬ。自分の心靈を救ふことや、自分だけが神靈と交通することは、昨日の宗教の機能であつたか知らぬが、今日の宗教ではさうは言はれない。心靈生活を以て宗教の一切切であるとするものは、宗教

の社會化を以て、寧ろ、心靈生活に有害とする傾きがある。さういふ人には、社會問題は心靈化しなければならぬとしても、宗教は社會化する必要がないと考へるであらう。ピイボデイ氏は And if it is the part of religion to spiritualize the Social question, so, on the other hand, the Social question is called to socialize the religious life (宗教から社會問題を心靈化すると同時に、社會問題からは、また、宗教を社會化すると言はなければならない) と云うてゐる。氏は宗教は個人の靈魂の救済を以て盡きるものではなく、それは、社會に擴がり、社會的義務希望及び夢想にまで高まるべきものであることを主張する。二十世紀の宗教は、個々人を競ひ合ふ分子と見るのではなく、世界を相競ふ一體とし、それを不可分な有機的なものとする。それは希望を社會化しなければならぬ。個人を個人として救ふのでなく、衆と共に一緒に救ふのである。貧者は富者と共に救はれ、雇人は雇主と共に、東洋人は西洋人と共に、黒人は白人と共に救

はれるのである。かういふ筆法で、ピイボデイ氏は宗教の社會化を説いてゐるが、私は未だ我國の宗教界にはこの意味が消化されてゐないと思ふ。數年來、社會事業と云ふものが勃興して來たために、宗教界も餘儀なく社會化する必要を認めざるを得なくなつた。が、未だもつて、宗教を社會化すれば心靈生活が失はれるとし、宗教は心靈生活であつて、社會生活でないと云ふ思潮が繁昌してゐる。この固陋な思潮はこゝ數年間は消滅しまい。それ故、しばらく、我國の宗教界は The religion of the individual と the religion of individualism とを混同してゆくのであらう。個人宗教は社會的契機を必要とするが、個人主義的宗教は社會を無視する。

宗教家の方から見た社會化の現状は如上のやうなものだとすると、また、社會化の方面から見た宗教は無用なものだとして取扱はれてゐる。宗教が既に社會と没交渉たるを主張するのであるから、社會運動の方では、てんで宗教を相

手にしないで行かうとする気分が生ずる。我國の社會運動は宗教に接觸しようとする。また、我國の青年運動を一觀したゞけでも、何人でも、直ぐ我國の青年運動には宗教的要素がないと云ふことに氣付であらう。これは、歐米の青年運動が社會生活を通じて心靈生活にいたることを目標とするものとは、雲泥の差があると言はなければならぬ。私は我國の青年運動に宗教的要素のないことを明に指摘する。それと共に、私はそれは我國の青年運動の一大缺陷であると斷定するを禁じえない。

由來、青年の健全なる發達をなすには、道德と宗教とは缺くことの能きない要件である。青年の教育を知識一天張りとする我國の現状は由々敷過誤に陥つてゐると見るべきである。青年男女の純潔には、性慾教育と云ふことも必要だが、この性慾上の知識を受入れる素地の問題が一層大切ではないか。我國の性的教育には二重の過誤がある。一つには、性慾教育を極度に恐れてゐることで、

神經過敏が益々事態をヨリ悪くすると同じく、男女の性的生活を極度に恐怖する結果、現に、我々の見るが如き男女の錯倒關係が紛生する。私は、この頃、ある花嫁が結婚の初夜、夫の暴行と稱して逃走したことを聞いた。エリス氏の性的心理學を讀くと、かやうな例證は満載せられて居り、敢て異例ではないが、かうなつても、敢て性的知識を授けようともせず、頑迷固陋を振りまわして居るのであらうか。

併し、性的知識があつたからとて、男女の純潔を保持することにはならない。これは後に詳しく述べるが、性的知識ばかりで、道德も宗教もなければ、男女の關係は決して純潔にいたるものではない。意志の鍛練、理想の樹立がなければ、豊富なる知識も何の役にも立たないのみならず、却つてヨリ以上の醜惡にいたる傾きをもつ。然るに、我國の青年運動には、宗教の要素が缺けてゐるので、理想をもつことは困難である。これも、後に述べるが、青年教育の主知主

義一天張りを以てしては、青年の純潔もその健全なる發達をも齎らすことは能きなからうと思ふ。こゝに於て我國現時の性的關係の混亂なる由々敷事態が惹起するのである。

第二節 青年と意志の鍛練

現代の性的混亂と倫理觀 現代の性的混亂は倫理的意識の明瞭と、その發達とを加へなければ、改善せらるべきものではない。一方には、性的要求があり、これに對して、倫理的意識及びその統制がある。この二つが適當なる調和をすることによつて、初めて、男女の關係は純潔なるをうるのである。然るに、現代は倫理的過渡時代である。過渡時代の倫理的意識は溷濁してゐるのが常である。倫理的意識は社會遺傳として傳達するが、過渡時代に於ては、傳達さるべき倫理的財産が不定薄弱なるもので、到底、それはその時代の人間の倫理を確保して行くことはできない。それが爲めに、過渡時代には、確保されない多數民衆が生ずる。かくて、倫理的意識は溷濁したものとたるを免れない。これに對し、現代の青年は、現代社會の特徴により、亂倫にをもむいて居る。

そもく、男子には亂倫の素因がある。男子は天性亂雜な性慾にいたる傾向をもつてゐる。これが、自づから、男子を多感多情ならしめ、一夫多妻的ならしめる。男子には好新慾とでも稱すべき性的傾向があつて、新らしい異性に向つて色慾を發動させる傾きがある。之れが爲め、自然に亂倫にいたる。然るに、現時の如き倫理的過渡時代には、健全な倫理的遺傳なく、従つて、倫理的な社會環境がない。で、男子の多感多情なる自然性は統制され抑壓せられない。かくて、男子の亂倫が遠慮會釋なく隨處に現はれることとなり、自然性と倫理的溷濁と相埃ち相補うて、性的混亂なる現象を生ずる。

性的廢類と經濟 この問題に就ては、既に述べてゐるから、順序を整へる範

園以上には述べないであらう。都市と淫賣との關係、並に、都市の大きさと淫賣需要との關係は既に説明した。都市には、現代文明の一つの特徴として、新中等階級に屬する月給取りや、學生や、兵隊が集まつてゐる。これが、淫賣の需要を惹き起す。新中等階級は大都市に集まつてゐるが、収入の乏しいために、容易に結婚して家庭をもつことができない。その爲めに、自づから亂倫にいたる傾きをもつ。學生や兵隊などは相當の年頃に至るも、尙ほ、勉學をつけ、義務に服しなければならぬので、こゝにも、亂倫にいたる現代文明の一面がある。それ故に、現時の亂倫は一朝一夕の問題ではなく、その由來するところ遠く、且つ、深しと云はなければならない。

然るに、現今の教育は主知主義で、道德及宗教に縁遠きものであり、青年運動は又補習教育の延長に甘むじてゐるため、益々、事態を悪くする傾がある。若し、道德及宗教の權威と効果を高めるやうな國民運動が起されてゐたならば、我國現時の如き性的混亂は緩和されてゐたであらうと思ふ。時代相と人爲とが相俟つて、現代の性的混亂を惹き起してゐるのである。

男女關係の錯倒と疲勞 現代人は過勞に陥つてゐるために、靜かに人生を享樂することができず、激烈なる刺戟を要求することゝなる。かくて、女と酒とに集中する。が、この激烈な燃焼された利那的の刺戟は人をして過勞に陥らしめ、そのために、神經衰弱の徵候をあらはし、倫理意識の溷濁を來す。されば、倫理的意識を明瞭にし、意志的統制の威信を恢復することは無論必要であるが、また、他方、疲勞状態を醫し、勞働時間を減少して、現代人のエネルギーを高めなければならぬ。もし、勞働時間を減少し、勤務時間を短縮すれば、現代人の過勞は減却し、自づから、倫理意識の透明となり、尖銳となり、他方、過激な燃焼されたる利那的刺戟を求むる傾向を緩和することができるであらう。かくて、現時の性慾濫用は緩和され、亂倫は減衰するであらう。併しながら、

これと同時に、現時の教育方針を一變し、主知主義より主意主義に轉じなければならぬと思ふ。現時の青年の如き、薄志弱行を公許せられてゐるやうな社會や時代に人となつては、性格の勝れたものを産出することの能きないのは自明である。青年よりも社會が悪く、又時代が悪い。その上、先輩や、先覺者や、教育家宗教家といふものが悪るい。今日の如き無思慮無頓着で進行するのでは、青年が今日以上に進出し得ないのも自然の理である。

青年の意志教育 孰れにしても、男女の亂倫が倫理意識の問題に集中し、そこに解決を見出すべきものたることは今や明白である。乃ち、青年の意志教育の問題が生ずる所以。

現代の教育は既に云うたやうに主知的であつて、知的啓蒙に主力を傾倒してゐる。そのため、知識は發達するが、意志は餘りに柔軟で、到底ものゝ役に立つべくとも思はれぬ。かゝる教育を世間では軟教育と云ふ。これに對し、硬教

育といふ文字が鑄造せられた。現時の教育者は、あまりに器械的技術的側面を強調するの傾きがある。これは、善い意味での科學的と云ふことであれば、それでも宜いが、現時の教育は一體として意志教育に重きを置かざるものとなつてゐる。そして、悪い意味での軟教育が全國に蔓延してゐる。學校教育も、補習教育も、青年會も、孰れも、主知的職業的である。職業を目標として、それに達すべき技術を修得するを以て目的としてゐるやうに見へる。私は教育専門家ではないが、現時の教育の根本方針は誤つてゐると思ふ。

そのために、現代青年の淫逸放縱と云ふ現象が現はれて來た。青年の亂倫の原因については既に分析を加へてをいたが、それと相映應じて、現代教育の暗黒面があり、愈々、青年をして奈落の底に沈ましめた。今日の青年には獸性や劣情を制御する高尚なる力がなく靈氣がない。それに、倫理的過渡時代の特徴たる倫理意識の溷濁を以てする。であるから、如何にしても、現代青年が純潔

でありうる筈がない。一知半解なる文學論や、乳臭な思想論や、赤い酒青い酒、カッフエー、女給と云つたやうに、益々肉感的に墮落し誘惑に征服されてしまふ。これ等の青年には、知識は相當にあるとしても、自己鍛練といふことが凡て等閑に付せられてゐる。皮相淺薄な知識がその總てであり、訓練を加へて造り上げた性格といふものがない。で、誘惑に抵抗する力がないのである。教育が全體として主知的で、精神的道德的の性質を缺いてゐるため、青年は日常必須の知識を有するとしても、それを使つて青春の血潮が湧き立つて來る衝動や官能に對し、正しき態度を採ることができない。性慾衝動や獸性は倫理意識の溷濁と性的混亂の世態とに映應して暴威を揮ふが、現時の主知的啓蒙は、もの知りを造つて、愈々、好奇の諸力を動かし、事態を悪くする一方である。かくて、品性陶冶と強い意志の訓練と云ふことが現代青年教育に對する中心問題でなければならぬ。

ウィリアム・ゼームス教授はその大著『心理學原理』のうちで、意志をつくるには、一日に一つづゝ嫌なことをするのであると云うた。これが、特に、青春時期の青年男女には必要であると思ふ。獸性や劣情や官能に對して戰を挑み、これを克服することを敢行せしむると云ふことが品性を造る楷梯である。それと同時に、少年青年に對し、高尚なる思想や情念や理想を植えつけて行くのである。然るに、我國の青年には、この高尚なる情念や理想の熱火が足りないのである。我國では、高尚なる情念や理想を與ふる宗教が殆むど無力である。教育のうち、宗教的意義が全然喪失されてゐる。そして、束縛され制御せられない我儘な放埒な少年や青年が濫造せられてゐる。今日の青年男女のうち、ゼームス教授の嫌なことを一日に一つづゝ斷行してゐるものがあらうか。二日たつても、三日たつても、一週間に一度でも、一月に一回でも、乃至、青年期に一度でも嫌な仕事に敢へて當つたと云ふことがあらうか。我儘な放縱な人間

を造ることが、今日の教育方針であるやうに見える。家庭でも、學校でも、社會でも、我儘勝手な人間を進むで濫造しつゝある。食いたいのものは食い放題、遊びたければ遊び放題、見たければ見放題、寝たければ寝放題と云ふのである。家庭では、凡て、これを黙許してゐる。乃至、進むで我儘放埒を煽つてゐる。今日の若い娘を見るがよい。如何に買喰いにつとめ、見榮を張り、遊びまわり、宵張りの朝寝坊で、如何にしだらなことであらう。嫌なことは何日たつてもしたことの無い娘達ちである。かくて、意志薄弱といふことが當然のつきものである。若い男女は劣情や獸性の襲撃に對し、恰も赤手防衛をしなければならなくなつた。敵の攻撃に對抗する何等の武器をも所有せざる有様である。少女や青年男女は外敵に對しては恰も風前の燈の如きものとなつた。これで、性的混亂が起らぬのが寧ろ不思議である。それに、お手本が如何にも悪い。武者小路氏流の亂倫は恰も理論的根據や倫理的主張を供給するかの如くで、現代

青年はそれをつくりの口吻をもつて、外的興奮や官能的逸樂に耽惑するのである。先輩の製造した理論は好きな道を辨護する利器として盛に使はれ、隨所に青年男女の亂行が紛生する。意志弛緩、薄志弱行、散漫薄弱とはこのことである。今日の青年は外的興奮や官能的誘惑に對しては、赤手空拳、無爲無能といふ有様である。それ故に、風前の燈と云はんか、燈火にあつまる夏虫と云はんか、殆むご言語同斷である。これが現時の世態そのものである。

食ひ放題、着放題、遊び放題、寝放題といふので、權利の濫發はやるが義務の觀念は微塵もない。食ひたいので食べるのだが、それが何故悪いか、寝たいので寝るのだがそれが如何に悪いかと云ふ筆法である。食つたり、遊んだり、寝たりする權利は要求し主張しなければならぬとあつて、盛に要求し主張する。しかし、それに對して、義務の觀念といふものが殆むごない。これは、青年や學生ばかりでない。勞働者でも、月給取でも、その他のものでも同一である。

すなはち、現代に於ては、全體として、義務の觀念なく、權利のみ獨り暴威を揮ふ世の中である。そこで、好きなことは何でもやるが、嫌なことは箸一本動かさぬといふ有様である。かくて、我儘勝手も、意志薄弱も、放埒も、混亂も生ずる。克己とか、自我制御とかと云ふことのない教育や、高尚なる情念と理想とを掲げない訓練の慘狀は正にかくの如きものであらねばならぬ。低い生活と高い生活とがいつでも争つてゐるが、低い生活よりも高い生活にいたる力の強い場合に初めて高い生活そのものに向ふことになるのだ。これに反し、低い生活の力が強いときには、如何にしても低い生活にいたるを避けがたい。然るに低い生活にいたる途は至れり盡せりて、義務の念は微塵もなく、官能的慾求の猛火炎々たるに於て、如何にして高き生活にいたることが能きようか。高い生活には、強固な意志と、高尚なる情念、及び、理想がなければならぬ。高い生活にふはしい情念や理想があれば、肉體的興奮や感情的刺戟を抑制し、それ

を統治し、それを意志管理の下に置くことができる。みだらな氣分や興奮はかくして統治せられる。意志的管理の確立があり、理想が樹立されるれば、劣情や獸性はその影を收めざるをえぬ。それ故、今日の主知主義の教育と權利主張とに對し、意志の鍛練と、理想の樹立と、氣を生的興奮より外らすことの併立を主張しなければならぬ。

第三節 青年と宗教

道德と宗教 道德の次ぎには宗教が来る。道德により、青年をして高い生活に向はせることは出来るが、それが、宗教により補はれるければ、道德的鍛練も中途半端なものとして終はらなければならぬ。我國の青年團や、ひいては、青年運動が修養一方で、宗教的意義の殆むと拂底してゐるものなる限り、その効果の深刻で永久的であることのできないのは毫も怪むる足らぬ。フェルスタア

教授は、道徳を補充し、これを高揚するものとして宗教をあげ、『純人間的道徳的の激勵は宗教の根本的人間觀によつて補はれなければ、如何にしても、永久の効果を齎らすものではない。すべての努力を積むも、深刻な宗教と哲學とに基く精神的人間觀がなければ、その意義は全然喪失し、高尚なる意志の鍛練も畢竟何等の結果をあげないであらう。そして、その大なる精神的人生觀と云ふのは、感覺世界や、先天的實在を以て全實在としないで、一層高等なる精神界の前提たり準備たるに過ぎないものとするにある』と云うてゐる。

我國の青年は多く無宗教であると云ふ。と、云つても、實際、宗教にまで高るやうな理解を開拓する力量がないためでもあらう。併し、兎に角、宗教に冷淡であると云ふのが今日の青年である。いつか、東京市の社會局が青年の信仰を調査したが、その多くは宗教に冷淡であり、或は、何の既成宗教若くは宗派にも屬せざるものであつた。私は現代無宗教の原因をこゝに論ずることは能き

ないから、その問題は外らさなければならぬが、青年文化の特徴によつても、宗教に對し冷淡無情をあらはして居るのである。それに、屢々述べるやうに、現時の青年には宗教的教育も宗教的氣分も與へられて居らぬ。青年運動は全體として、無宗教的なものである。かくして、一般に青年は宗教に遠ざかり、無關心なる状態となつて居る。これが、主知的教育に對し、亂倫の由々敷根源をつくり上げてゐるのである。宗教なき修養や訓練は人をつくつて魂を入れぬものである。宗教的理想が開拓され樹立されないと、道徳は單に現世的なものとして見られ、永遠的意味への接續なきものとなる。それ故に、單に、現世の道に支配されて終るに過ぎないものは、世の觀樂や興奮に抵抗する力が微弱であり、その力さへも減衰がちで、昏迷と混亂とが漸次に濃度を増し、道徳的命令は竟に敗退消滅することゝなる。かういふわけで、我國現時の青年男女の亂倫は宗教的理想の喪失といふところまで遡ることができる。實に、今日の社會は上下

實利に没頭し、青年の精神教育も心靈開拓も一擲し去つて顧みざる有様である。で、青年が確信をもつて、非常なる誘惑を壓倒することができないのに何の不思議もない。もし、道德に次いで、宗教にくるやうに我國の社會が仕向けられてゐたならば、道德の提出する命令や規範は宗教の久遠性にまで高められ、超越世界よりの意味と消息をもつて、道德を深め強め、且つ、これを完成することゝなつたのであらう。無限に向つての憧憬、高きものに向つての思慕の情、同類の愛、人間愛、憐人愛、人道と云つたやうな高尚なる精神生活が宗教によつて青年に許されたであらう。

宗教の超越性 無限に向つての憧憬や、歸依や、人類愛や、人道的精神は、たゞに、感覺世界を征服するだけでなく、それから、全く超越する。この宗教の超越作用と云ふことが必要である。殊に、性的興奮や官能的刺激に敏感にして誘惑に陥り易き青年にとつては、超越作用を経て天上遙かに飛翔し去る必要が

ある。これが、すなはち、感覺や官能の羽化登仙である。地上のものが化して、天上のものになるのだ。それで、如何に低く賤しき感覺や官能でも羽化して登仙し、天上界のものになつて了へば、最早、そこには、純粹精神や心靈があるばかりで、感覺も官能もない。これが青年に宗教とその理想との必用なる所以である。フェルスタア氏の、『倫理學と哲學とは單に禁止し忠告するのみだが宗教は轉向させるものである』と云ふ意はこゝにある。氏の轉向は羽化登仙することであり、超越することを意味するのであらう。この羽化登仙は感覺を清淨なものとなし、凡ての不淨なる性向や氣分を純化するから、性的興奮や官能的誘惑も容易にその效を奏せざるものとなる。然るに、無宗教であり、乃至、宗教に冷淡であつたりすることは青年をして自から性的混亂に導かしむるものである。我國の青年及青年會に宗教とその理想とがないと云ふのが性的混亂のよつて來る一原因でなければならぬ。戀愛の神聖や自由な戀愛を曲解してまで

も、野合戀愛に耽らうとするのは、矢張り、道德及宗教に冷淡であるからである。殊に、一般世間の宗教教育に冷淡である結果は、かやうな慘害となつて現はれて來なければならぬ。この時弊を矯正するものとしては、宗教及理想の自然征服の一途あるのみである。宗教によつて、自然を征服しさへすれば、精神や心靈の自發的な活動、自主的な權威を恢復することができる。かくて、自然が精神を克服することはできなくなる。自然と精神との對立に於て、精神の自主性を發揮せしむるものは宗教である。宗教によりて、初めて、精神は自然を征服して自由をうる。この場合、感覺や官能が克服され、次いで、淨化される。

向上と向下 高き生活に達するためには向上しなければならぬ。低き生活にいたるには下方に向はねばならぬ。現代の生活は低き生活にいたらしむる向下傾向に充ちてゐる。アメリカあたりでは Play Ground movement といふものが

行はれてゐる。この運動は、アメリカでは、一九〇〇年頃起つたらしいが、一九〇六年には四十一ヶ所の運動場があり、自治體がそれを維持經營してゐた。一九一三年には、米國運動並に娛樂協會の報告に據ると、三百四十二都市に二千四百の運動場がある。その經費は千百四十萬圓に上り、前年の支出に超過すること、正に三百萬圓である。過去十ヶ年間に、米國の各都市が運動場開設のために費やした總額は一億二千萬圓に上る。一九一六年には六萬人の男女が専門に運動場の監督や經營に當つてゐる。これ等の運動場築造運動は、最初社會殖民館や、地方運動並に娛樂協會や、婦人俱樂部や、商業俱樂部の主唱したものであるが、その効果をあらはすや、乃ち、市役所がそれを取り上げ、自から運動場開設の衝に當るやうになつて、アメリカでは運動場の發達に連れて、一方には、大公園などの大運動場と云ふものと、他方、小公園の運動場及び殖民館に關連する學校の運動場といふものが出來た。

私は不良少年を實地研究してゐるが、概して、微罪のため不良兒を檢舉して警察へ連行することは悪い結果を與へると考へる。私は、屢々、警察署で不良兒を検査したが、警察へ出入する不良兒は警察に馴れ、粗暴凶惡の性質を帯びてゐる。これ、現時、不良兒取扱に關する一缺陷である。警察では改善のために無論全力を擧げてゐるが、たゞ檢舉するばかりで、改善する何等の機關もないのだから、赤手空拳、金儲けをやるやうなもので、何とも仕方がない。かくて放免と檢舉とを繰り返してゐる。斯様な不良兒處遇法は根本的に改善しなければならぬ。瀕々微罪を檢舉して、警察へ拉致することは、その猛惡を加重することゝなるばかりだ。

不良兒と運動場とが關係があると云ふことは漸次に分つて來た。紐育の少年裁判所に現れた兒童の二割五分は、市中の街路で運動の禁止に違反したものだといふ。一九〇七年に、アメリカのカロライン・ベルグソンと云ふ女保護司が職

務の實際上の經驗から、少年犯罪と運動場の有無とが關係のあるものだと云ふことを立證した。翌一九〇八年にシカゴ公民慈善協會のバーインズと云ふ人が、少年裁判所の材料を利用して、運動場と不良兒との關係を研究したが、それによると、大公園の影響といふものは無いと云ふことが分つた。即ち、大公園は少年犯罪輕減に効果のないと云ふことが分つたのである。これに對し、小運動場は少年犯罪減少に効果のあるもので、シカゴ全體では一九〇〇年より一九〇七年の間に、一八プロセントの不良兒を減少したが、小運動場の周圍では二四プロセントを減少した。其後、バーインズ氏監督の下に、一九一六年にクリブランドで娛樂調査といふものが行はれた。リース氏に據ると、『市中に公園とか運動場とか出来ると、不良兒を減少することになる。少年の天性は悪ではなくして善である。少年は本來警察と争ふよりも、秩序的に運動すること欲するものである』。ヘザリントン氏は、『少年感化院に收容した八百四十

人のうち、七割乃至八割の少年は、規則正しい遊戯をする機会があつたならば、感化院に收容する必要は起らなかつたらう』と云うてゐる。

私は、向下が如何にして起るか、また、向上が如何にして向下を轉ずることによりて救はれるかを、立證するために、數多き例のうちから、不良兒と運動場との關係を提示したに過ぎない。今日の世態は向下的環境に充ちて居る。たえて少年青年を向上せしむる途が具はつてゐない。知識を偏重し、職業に集中し、品性の陶冶や、宗教の情操を高めるやうな運動を起してゐない。すなはち、青年の向上を圖つてないのである。然るに、意志の鍛練や、宗教的理想が缺乏するために、氣儘や、墮落や、癡癡が時をえ顔に咲き出でてゐる。これ、向下が遺憾なく出揃つてゐるものと言はなくてはならぬ。

この向下の傾向を回轉して、向上にいたらしむるものは、即ち宗教そのものである。道德に次いで宗教であるのだ。道德は個人の意志を鍛練して、強固

な品性や性格をつくるが、宗教は更らにそれに靈感を附與し、羽化登仙して、精神的心靈的意義を樹立せしめる。かくて、全體として、青年の向上があり、そこに、純潔にして高尚なる青年男女が現はれるであらう。宗教的理想によつて、青年は不淨なる感覺より解放せられ、自由を得るであらう。

第九章 性慾教育

第一節 性的啓蒙

性的知識の現状 不良少年は通常低能である。低能と不良との相關は、既に知れわたつてゐる。低能であるがために、無論、不良少女は不正な性交の結果がどんなものになるかを知らない。また、縦へ、知つてゐても、誘惑に抵抗する力がない。その上、惡漢は到るところに徘徊してゐて、誘惑の網を張つて居

る。無智と、意志薄弱と、惡漢との、三拍子が揃つてゐて不良少女を攻め立てるのだから到底助からない。そこで、先づ、性交の結果が一切分らない。これが、不良に導く第一歩である。性の無智といふことが、墮落に關係あるものと云ふことは既に明かにせられた。かくて、不良にされた少女は、再び無智で、男女の關係に就て與り知るところがない少年の間に毒針を投ずる。これに、多くの少年が引かゝつて、再び墮落してしまふ。これで、性についての無智が如何に少年少女に慘害を與へてゐるか分る。小學生のうちで、懷妊するものが時々あるが、これ等の少女は孰れも性の知識とては何等持ち合せない。これも無智の齎す害毒である。通常、世人は性に關しては亂雑であり乍ら、觸らずにおかうと云ふ筆法で、却つて、大害を流してゐる。性と云へば、眼の色を變へる。

結婚の初夜逃走する例は乏しくない。通經で愕くものがあり、惡病と思ふも

のがある。フランスの一少女は通經を惡病と思つて、セーヌ河に身を投じた。斯様な慘狀を呈するに至つても、なほかつ、性的知識を授けることは宜敷くないと云はなければならぬであらうか。

性教育の是認 今日では、最早、性的啓蒙に絶對的に反對するものはないであらう。性教育は一般に是認せられたと云つてよからう。但し、その方法に就ての意見は區々で、未だ一致してゐない。性的知識の至極簡單なものは一寸説明せらるれば、言下に分るが、これが説明せられる機會がないために、一生解らないことが屢々ある。これではいけないと云ふことだけは、既に確定したと言つてよい。性の事實は、自然的な生理的なもので、何人にでも例外なき事實である。この事實を教ふることを差控へる慘害は、教へる害より多いであらう。エリス氏は *It is becoming more and more widely felt that the risks of ignorant innocence are too great (無智による無邪氣の犠牲が餘りに大きい)* と云

うてゐる。最早性的無智の害悪は餘りに大きく、到底、そのまゝに放任して置くことはできないこととなり、茲に、性教育と云ふものが生れたのである。

子供は性について懷疑的である。小供の性についての懷疑をもつて、異常のこととしてならぬ。それは、神経的の症候でも、過敏でも、何でもない。寧ろ正常な現象である。子供は好奇心に富むものであるから、萬事懷疑的である。何でも問ひ訊す有様である。生に就ても、荐りに問ひたすので、どこから、赤坊は生れるかと問ふのが常である。そこで、忌應しなしに、子供の質問に答へ、疑念を解かなくてはならぬ。ところが、こゝで、父母や兄弟がよいがげんな答へを與へるので、子供の出生觀は眞にお伽話のやうなものである。併し、これではいけないのだ。そんなお伽話のやうなものを供給する時代が永くかゝつては困る。

何故、性的知識を授けることが悪いのか、子供が性について訊す場合に、そ

れは自然のこと、生理に屬すること、萬人の悉く持ち合はす尋常なこと、更らに、嚴肅なる事實そのものと考へなくてはならぬ。それはきまりが悪いことでも話して悪いことでも、何でもないのである。たゞ、ナチュラルにやれば宜いのだ。子供が訊いたら、自然のものとして、併し、氣をつけて、性の事實を物語るがよい。子供には、隠す必要はない。隠し立てをすると、忽ち、變な氣になる。極めて自然に、ありのまゝに、且つ、嚴肅に性の事實を語るがよい。エリス氏は

As child of four may ask questions on this matter, simply and spontaneously. As soon as the questions are put, certainly as soon as at all insistent, they should be answered in the same simple and spontaneous spirit, truthfully though according to the measure of the child intelligence and his capacity and desire for knowledge (四歳の子供は、このことに關し、單純に自然に質問するであらう。質問するや否や、また、それをせがむや否や、それに對し子供そのまゝの

單純さと自然さを以て本當の返答をするがよい。但し、子供の智慧と、能力と、要求とに應じて」と云うてゐる。この時期は六歳を越えてはならぬとエリス氏は云ふ。もし、この時期を越えると、他から、悪い智慧をつけ、不純になる慮れがある。それから、もう十歳にもなれば、それを自然のまゝに單純に訊くことが能きなくなるのみならず、母の方でもなんだか、きまりが悪くなるを免れない。女子の方が早熟なので、一層男子よりも早く性的開發をする必要がある。男の子にも、女の子にも、母は慈愛深き眼を向けて、問はるゝまゝに正直に答へ、好奇心を充たすがよい。親切に愛情をもつて、それを自然のまゝに、事實を事實として、はにかまず教へるところに純潔なる性的知識がくる。最早、性的啓蒙を躊躇する時代でなくなつた。性的開發は差岡へないと云ふことになつた。更らに、進むで、グッドチイルド博士のやうに *It is little short criminal to send our young people into the midst of the excitements and temp-*

tations of a great city with no more preparation than if they are going to live in Paradise. (天國に行くのに、何の用意をしないやうに、大都市の興奮と誘惑とのうちに飛び込むのに何の用意も若いものにさせないと云ふのは罪惡である)と云ふに究まらなければならぬ。性的知識を全然與へないで、子供の前途を誤らしむると云ふことは、親の道德上の犯罪である。

性的開發の現況 性的啓蒙は是認されても、性的教育の方法は決らない。蓋し、性的教育の方法論は未決であるとするを當れりとする。我國では無論のこと、歐米に於ても、方法に關しては、理論の時代で、何等決定するものがないと云へよう。英國や、獨逸や、スカンディナビヤや、フィンランドでは、既に氣運が熟しては居るが、方法については、精細に決定してゐないやうである。獨逸では、高等學校で、性的教育を實行してはゐるが、まだ不完全なもので、性教育の發端に當つてゐると云ふに過ぎないだらう。一九一一年には、プロシ

ヤの八百校の中七十六校で性教育をやりだした。教育には、教師や醫師をして當らしめ、放縱の因果だの、性の抑制の結果だの、アルコール飲用の害悪などについて説明をしてゐる。併し、生徒の出席は任意と云ふことにしてゐる。瑞西でも、プロシヤ程度の性教育を男校長若くは女校長指揮の下に行つてゐるが、未だ、これと纏まつた結果を得てゐないやうである。丁抹も、諾威も、佛蘭西も、性教育をやつてゐるが、矢張り、未だ事初期に屬し、目ざましい結果をえてゐない。我國では、性教育は初期に屬し、未だ是認の程度にさへ達してゐない。

第二節 性教育者及方法

性教育者 醫師を通じて、性教育をなすの可否であるが、私は醫師の性教育には反對する。そして、醫師を以て、性教育に不適當なものとす。

そも、性教育を以つて、單に生理病理の知識を與ふるものだとするものが

誤りである。そこで、性教育の範圍を限定する必要が生ずるが、私は、フェルタア氏のやうに、性教育を以て、一般教育の一種だとしようとする。そして、特殊な性教育といふものを特設することは妥當ならずとする。性に關しては、一般性教育であれば宜い筈である。正當なる一般性と全體としての教育が性の開發に關する方法でなければならぬ。あまりに、微細にわたり、性慾的知識を與ふることは、過度の性的興奮を惹き起し、不純なる肉感を旺盛ならしむる慮がある。それで、性に關しては、或る程度までを明るくし、ある程度までは暗くしてをかねばならぬ。これが過不足のなき性教育である。性に關しては、全くその知識のない場合には、素より重大なる危懼となり混亂となる。併し、餘りに過重な性的知識は、性的興奮を起し、却つて有害の結果を齎す。殊に、意志の鍛練や性格の訓練を度外した過度の性的知識は極めて有害である。性慾に關しては、過不足なき程度を以て限度となし、善良なる性格と強固なる品性

をつくることを主眼としなければならない。

併し、性慾教育の範圍を以上の如く限定すれば、單に、生理病理の知識のみを所有するに過ぎない、醫師は、性教育者として不適當であると云はなければならない。なる程、醫師は生理病理の専門的知識をもつて居るであらう。併し、専門的知識をもつて居ると云ふことは、寧ろ、過度な性的知識を供給する傾きを有ち、自づから、過重なる性的興奮に導き易い。然るに、青年に與ふる性的啓蒙は専門的であつてはならず、却つて、一般的であれば宜いので、専門家たる醫師は却つて性教育者として適當でないといふことになる。その外、性教育には、立派な品性や嚴肅なる性格を豫想するから、單なる生理學病理學者に過ぎない醫師は必ずしも適當と云ふことはできない。性的教育には、意志的鍛練が附随しなければならぬ。そして、感情及意志の方面より接近しなければならぬ。かういふ譯で、竟に醫師は性教育者として、適當でないといふ結論となる。

次に、教師であるが、教師に就くは性教育に堪えうる良教師があるか否か問題である。もし、不熟練な教師であるならば、無論、有害である。性教育擔當者としての教師は、品性や性格の優秀な事強固なものでなければならぬ。そして、自づから、眞面目な嚴肅な感化を青年に及ぼしうるものでなければならぬ。次に、性教育擔當者としての教師は、性慾教授に熟練したものでなければならぬ。過度の性的興奮を起したり、不淨なる連想や、觀念を與へるやうな教師であつてはならぬ。その上、性の問題は極めてデリケートであるから、人生の實際に通じ、實際的判斷力に優れたものでなければならぬ。氣轉の利かぬやうな凡鞍は到底性教育者たることはできない。

以上のやうな資格があつて、初めて、性教育者としての教師ができるのである。もし、斯様な資格のある良教師があれば、教師を以て性教育に當らしめて宜いわけであるが、もし、さういふ教師がなければ、却つて、いちつて悪くす

る慮れがあるので、初めより、いちらぬ方が宜い。

父母の性教育者として適當であると云ふことは一見の上でも分つてゐることだ。子供にインフイデンシャルな關係をもつ母が性教育者として優れたものと云ふことは分り切つてゐる。その上、性教育はクラスとして取扱ふことはなるべく避けなければならぬので、個別的取扱をなすことの能きる父母を以て、適當な性教育者と見做さなければならぬ。性の開發は人により境によつて異なる方法によらなければならぬ。但し、今日の父母のやうに、性的知識に無頓着であり、全然無智であるやうでは、本來、父母そのものは適當な性教育者としても、性に無智な父母までも、適當な性教育者と言ふことは能きない。そこで、父母をもつて、適當な性教育となすのは、性的知識をもつてゐるかどうかにかゝる。

性的教育の方法

學校に於ては性の教育は學齡兒から初め、義務教育終了ま

でを第一期とし、それから、高女及び中等學校の一學年より十六歳位までを第二期とし、それ以上成熟期に入るものを第三期として、性教育を施すべきものであらう。恰も、アメリカ性衛生協會の決議せし年齢の區分も大體私のもので同一であつて、同會では、第一期を一歳より六歳まで、第二期を六歳より十二歳まで、第三期を十六歳より熟期までとしてゐる。同協會の方案では、六歳より十二歳までの兒童には、動植物の生殖を教へ、これによつて、性教育をなし、十二歳より十六歳のものに對しては、哺乳動物の生殖を教へ、これを人類に適用し、併せて、性的道德の意義を明かにし、彼等心身の變化に關する意味を知らしめ、十六歳以上のものに對しては、遺傳の知識、次代に關する德義、及び、花柳病の危険についての知識を授ける。

性教育の原則 性的教育は既に是認せられてゐる。然らば、性的知識の附與は今や問題ではないと云はなければならぬ。併し、單なる知識は、性といふ

が如き過度なる好奇と興味と興奮とを伴ふものに對しては、無効であるとしなければならぬ。青年を性的危機より救ひ出すものは、乾燥無味なる知識よりも、豊麗にして生氣にとむ感情や意志でなければならぬ。さすれば、品性といふものを性的道德についての中樞としなければならぬ。強固なる性格や品性の力をかりて、淫逸放縱なる性情を抑制し、壓倒するわけである。最も有效なる性教育は克己自制を鍛練することの裏にあると考へなくてはならぬ。もし、情慾を壓倒し抑制する無限の精神力及び心靈を樹立するに至れば、その青年には、精神的道德的統治が開かれたもので、最早、何等の淫風にも邪惡にも克服されないものとなる。淫慾が過度の興奮を伴ひ、その支配の下に、青年が浮沈するやうなことがあれば、恰も、浮草のやうに翻弄せられるを免れない。生殖機能は過度の興味と肉體的興奮を伴ふから、精神の平均を失はしむる慮がある。過度の性的興奮をさくことは何よりも、青年をして健全ならしむる所以で

ある。性的知識は決して過度の興奮を伴つてはならぬ。それ故、子供の折り、自づからなる事實として、無邪氣に何氣なく性を語り聞かせるが最上の方法である。かくて、性の開發を了すべきである。既に、十二歳以上になれば、そこに何となく、いや味が出来る。フェルスタア教授は兒童に餘り早く性的知識を授けてはならぬ、それは兒童を早熟に導くと云つてゐるが、これは教授の誤解で、自づからなる純な無邪氣な性的開發は自然そのもの生そのもので、何等特殊なるものとしての早熟を齎らす憂はない。親子の關係が親密であればある程、益々、長く、性慾上の知識を授けることを差控へることが出来るといふフ氏の意見は、未だ性慾の開發を以て悪いことだとする舊思想に囚はれたもので、勿論、正當なる見解と云ふことはできない。

そこで、分つたことは、性慾の知識的開發の必要といふことである。これは、フ教授の考へてゐる程度以上に開發しなければならない。特に、兒童には眞實

にして自づからなる性的開發を遂行しなければならぬ。全體としては、知識上の性的開發は第一前提でなければならぬ。併し、それと同じ程度に於て、若くは、それよりも以上の程度に於て重要なものは、倫理的訓育である。孰れにしても、過度の性教育は避けねばならず、過度の性的興奮は有害である。これを抑制し統治するものは意志及宗教の管理である。意志及宗教の管理がなければ、性教育を全うすることは能きぬ。従つて、性的開發の目的を達することが能きない。そこで、倫理的訓育は性教育の中樞であらねばならぬ。マルキウス氏が感情と意志とを以て性教育の基本だとしてゐるのも、この意味に外ならぬであらう。

私は性教育に關し斯様に結論する。

性教育は智識的開發であると共に、倫理的訓練である。即ち、倫理的動機及び意義の上に打ち立てられたる性的知識の開發である。確實なる性教育は知識

と共に、感情をならし、意志を抑へ、理想をたてなければならぬ。性教育の根本は知的開發ではなく、それは、寧ろ副次的のものであり、感情教育並びに意志教育が基本たるべきものである。こゝに於て、性教育は倫理的動機及び意義と宗教的情操及理想の上に打ち立てられたる性的知識の開發であると言ふことが能きる。

現代人の戀愛思想 終

大正十三年六月十日 印刷
大正十三年六月十五日 發行

現代人の戀愛思想

定價金貳圓五拾錢

著者 海野幸徳

發行者 大谷仁兵衛

印刷者 村上勘兵衛

内外出版株式會社代表者

京都市下京區三條通御幸町西入

京都市下京區西洞院通七條南入



發行所

京都市下京區西洞院七條南
東京市神田區錦町一ノ十九

内外出版株式會社

振替穴版三二九五番

内外出版株式會社印刷部

龍谷大學文學部教授 海野幸徳著

輓近の社會事業

約五百頁
六月中發賣

- 第一章 我國の社會事業
- 第二章 貧民の社會政策
- 第三章 宗教の社會政策
- 第四章 社會事業の分權主義
- 第五章 社會事業家の資格
- 第六章 社會事業補助金の是非
- 第七章 市場政策
- 第八章 我國の社會事業
- 第九章 方面委員制度
- 第十章 融和事業
- 第十一章 勞働宿泊所の經營
- 第十二章 公設質屋の運用
- 第十三章 公設浴場の運用
- 第十四章 免因保護政策
- 第十五章 優生學的社會政策

我國社會事業學の權威者としての海野教授は我國に社會事業文籍の缺乏を憂ひ、これを完成するため、心血を凝ぐ決心を固め、陸續、社會事業文籍を出版することゝなつたが、其先鋒として現はれたものが本書である。本書は現今隆盛を極めつつある社會事業の各部門を取扱ひ、かつ、これに明快親切なる解釋と批判とを施したもので恰も斯學文獻の缺乏せる今日、暗夜に燈火を得たるが如きものである。官公私の社會事業家は勿論、社會政策家、行政家、教育家及社會改良に志ある人士必讀の著作たるべし。

告豫刊近書叢會社外内

龍谷大學文學部教授 海野社會事業研究所長		海野幸徳著	
一	學校と活動寫眞	大正十三年六月發賣	
二	現代の青年運動	同年八月	同
三	兒童保護問題	同年十月	同
四	性教育の方法	同十二月	同
五	賣笑問題	大正十四年二月	同
六	消費者の社會運動	同四月	同

日本風俗史綱	文學士江馬務	定價(各)參圓 送料(各)拾參錢
日本歲事史 <small>容儀服飾篇上中 京都の部</small>	文學士江馬務	定價參圓八拾錢 送料貳拾五錢
江戸文學の研究	京大教授藤井乙男	定價貳圓五圓 送料貳拾五錢
歴史家の旅から	京大教授坂口昂	定價貳圓八拾錢 送料拾七錢
詭辯と其研究	同志社大學教授荒木良造	定價貳圓五拾錢 送料拾七錢
秘國西藏遊記	青木文教	定價參圓五拾錢 送料拾九錢
啞の如くに語る	文學士土田杏村	定價貳圓 送料拾八錢
創作集 四十歲	京大助教授成瀬無極	定價貳圓參拾錢 送料拾九錢
東山夜話	京大助教授成瀬無極	定價壹圓五拾錢 送料拾七錢
長編 童話 鐵の靴	山村暮鳥	定價參圓八拾錢 送料貳拾五錢

525

194

終

